松山市文化財調査報告書 209

衣山東組遺跡
久万山本遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2023

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

衣山東組遺跡
久万山本遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2023

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序　言

本書は松山平野西部、衣山・久万ノ台地区における個人住宅建設に伴い、国庫補助を受けて実施しました埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。

同地区は低位丘陵部と平地部からなり、地区内には愛媛県立松山西中等教育学校をはじめ、閑静な住宅街が広がっています。なお、地区内における発掘調査事例は極めて少なく、集落様相の解明には至っていない状況です。

衣山東組遺跡からは、古代末から中世初頭の掘立柱建物址や江戸時代の溝を発見しました。このうち、掘立柱建物址からは白鳳期の瓦が出土しており、該期における集落様相の解明や瓦研究のための重要な手がかりを得ることができました。一方､久万山本遺跡では弥生時代後期の竪穴建物址や土坑が発見され、久万ノ台地区における弥生時代集落の存在が明らかになりました。

このような成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対するご理解とご協力のたまものであり、心より感謝申し上げます。本書が文化財保護や教育文化の振興、さらには埋蔵文化財の調査・研究の一助となれば幸いです。

令和５年３月

松山市教育委員会
教育長　前田　昌一

例　言

1．本書は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが、平成27年度（衣山東組遺跡）と平成29年度（久万山本遺跡）に国庫補助を受けて実施した個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。

2．本書で使用した遺構名は、略号化して記述した。
竪穴建物：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP

3．本書で使用した標高値は海抜標高を示し、方位は世界測地系を基準とした真北である。

4．本書掲載の遺構埋土・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2019）に準拠した。

5．本書掲載の遺構図や遺物図の縮尺は、スケール下に記した。

6．発掘調査における国土座標軸測量は、有限会社四国測量設計（衣山東組遺跡）と株式会社エクセル調査設計（久万山本遺跡）に業務を委託した。

7．発掘調査時の写真撮影は、調査担当者である山本　健一と水本　完児、及び大西　朋子（写真担当）が行った。また、報告書掲載の遺物写真撮影や図版の作成は大西が担当した。

8．本書掲載の遺構図や土層図は調査担当者が作成し、遺物の復元や実測・製図は調査担当者の指示のもと、池内　芳美、富谷　英子、原　冨美、和泉　順子、平岡　直美、山下　満佐子、山之内　聖子、二宮　八咲が行った。

9．本書の執筆は第１・２・４・５章を水本が担当し、第３章は山本が担当した。なお、浄書は平岡が行った。

10．本書で使用した遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第１章　はじめに……〔水本〕……**1**

第１節　調査に至る経緯

第２節　調査・整理の経緯……2

第３節　調査・整理及び編集刊行組織

第２章　遺跡の立地と歴史的環境……〔水本〕……**4**

第１節　遺跡の立地

第２節　歴史的環境……5

第３章　衣山東組遺跡……〔山本〕……**11**

第１節　調査の経緯

第２節　層　位……12

第３節　遺構と遺物……14

第４節　小　結……21

第４章　久万山本遺跡……〔水本〕……**25**

第１節　調査の経緯

第２節　層　位……26

第３節　遺構と遺物……30

第４節　小　結……44

第５章　調査の成果と課題……〔水本〕……**53**

挿図目次

第２章　遺跡の立地と歴史的環境
第 1 図　松山平野の地形分布図（縮尺 1：200,000）…… 4
第 2 図　周辺遺跡分布図（縮尺 1：30,000）…… 6
第 3 図　衣山・久万ノ台地区の遺跡分布図（縮尺 1：15,000）…… 7
第３章　衣山東組遺跡
第 4 図　調査地位置図（縮尺 1：2,000）…… 12
第 5 図　北壁・西壁土層図（縮尺 1：50）…… 13
第 6 図　遺構配置図（縮尺 1：100）…… 14
第 7 図　掘立 1 測量図（縮尺 1：40）…… 15
第 8 図　SP1・SP4 測量図（縮尺 1：20）…… 16
第 9 図　SP3 測量図（縮尺 1：20）
第 10 図　SP2・SP5 測量図（縮尺 1：20）
第 11 図　掘立 1 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：4）…… 17
第 12 図　掘立 1 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）…… 18
第 13 図　SD1 測量図（縮尺 1：40）…… 19
第 14 図　SD1 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 20
第 15 図　撹乱出土遺物実測図（縮尺 1：3、1：1）
第 16 図　衣山窯跡出土軒平瓦拓影…… 22
第４章　久万山本遺跡
第 17 図　調査地測量図（縮尺 1：200）…… 25
第 18 図　1 区土層図（縮尺 1：30）…… 27
第 19 図　2 区東壁・北壁土層図（縮尺 1：30）…… 28
第 20 図　2 区西壁・南壁土層図（縮尺 1：30）…… 29
第 21 図　遺構配置図（縮尺 1：60）…… 31
第 22 図　SB201 測量図（縮尺 1：50）…… 32
第 23 図　SB201 炭化材・焼土検出状況図（縮尺 1：50）…… 33
第 24 図　SB201 内炉址測量図（縮尺 1：30）…… 34
第 25 図　SB201 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：4）…… 35
第 26 図　SB201 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：4）…… 36
第 27 図　SD201 測量図（縮尺 1：30）…… 37
第 28 図　SK101 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）…… 38
第 29 図　SK102 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）…… 39
第 30 図　SK103 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）
第 31 図　SK201 測量図（縮尺 1：30）…… 40
第 32 図　SK202 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）

第 33 図　SK203 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）…… 41
第 34 図　柱穴測量図（縮尺 1：30）…… 42
第 35 図　柱穴出土遺物実測図（縮尺 1：4、1：3）…… 43
第 36 図　第Ⅳ層・地点不明出土遺物実測図（縮尺 1：4、1：3、1：2）…… 45

表目次

第 1 章　はじめに
表 1　調査地一覧 …… 2
第 2 章　遺跡の立地と歴史的環境
表 2　衣山・久万ノ台地区の遺跡一覧 …… 8
第 3 章　衣山東組遺跡
表 3　掘立柱建物一覧 …… 23
表 4　溝一覧
表 5　柱穴一覧
表 6　掘立 1 出土遺物観察表（瓦）…… 24
表 7　SD1 出土遺物観察表（土製品）
表 8　撹乱出土遺物観察表（石製品）
表 9　撹乱出土遺物観察表（金属製品）
第 4 章　久万山本遺跡
表 10　竪穴建物一覧 …… 47
表 11　溝一覧
表 12　土坑一覧
表 13　柱穴一覧
表 14　SB201 出土遺物観察表（土製品）…… 48
表 15　SK101 出土遺物観察表（土製品）…… 50
表 16　SK102 出土遺物観察表（土製品）
表 17　SK103 出土遺物観察表（土製品）
表 18　SK202 出土遺物観察表（土製品）
表 19　SK203 出土遺物観察表（土製品）
表 20　柱穴出土遺物観察表（土製品）…… 51
表 21　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）
表 22　第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）…… 52
表 23　地点不明出土遺物観察表（土製品）

写真図版目次

第３章　衣山東組遺跡

図版 1　1. 遺構検出状況（北西より）
　　2. 西壁土層（東より）
　　3. 掘立１検出状況（北より）
図版 2　1. SP1・SP4 検出状況（北より）
　　2. SP2・SP5 検出状況（北より）
　　3. SP3 検出状況（北より）
図版 3　1. SP1・SP4 土層（東より）
　　2. SP1 遺物出土状況（東より）
　　3. SP1・SP4 完掘状況（東より）
図版 4　1. SP2・SP5 土層（北西より）
　　2. SP2 遺物出土状況（北より）
　　3. SP5 完掘状況（北より）
図版 5　1. SP3 土層（東より）
　　2. SP3 遺物出土状況（北より）
　　3. SP3 完掘状況（北より）
図版 6　1. SD1 遺物出土状況（東より）
　　2. SD1 遺物出土状況（西より）
図版 7　1. 出土遺物①（掘立１：1・2）
図版 8　1. 出土遺物②（掘立１：3 ～ 6）
図版 9　1. 出土遺物③（SD1：7・9・11・14・16、撹乱：17・18）

第４章　久万山本遺跡

図版 10　1. 調査地より松山城を望む（北西より）
　　2. 調査前全景（北西より）
図版 11　1. 調査地全景（北より）
　　2. 基本土層（東より）
図版 12　1. １区遺構検出状況（北より）
　　2. ２区遺構検出状況（南より）
図版 13　1. １区遺構完掘状況（南東より）
　　2. ２区遺構完掘状況（南より）
図版 14　1. SB201・SD201 検出状況（南より）
　　2. SB201 炭化物検出状況（南より）
図版 15　1. SB201 炉址検出状況①（東より）
　　2. SB201 炉址検出状況②（南より）
図版 16　1. SB201 炉址検出状況③（北西より）
　　2. SK101 検出状況（東より）
図版 17　1. SK102 検出状況（東より）
　　2. SK103 検出状況（西より）
図版 18　1. SK201 半截状況（南より）
　　2. SK202 半截状況（南東より）
図版 19　1. SK203 検出状況（東より）
　　2. 作業風景（南西より）
図版 20　1. SB201 出土遺物
図版 21　1. 出土遺物（SK101：41・42、SK202：47、SK203：50、第Ⅳ層：64・65・71 ～ 73）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

松山市は1989（平成元）年度より、国から補助を受けて個人住宅の建設や中小零細開発等に伴う発掘調査（本発掘調査という。）及び重要遺跡の保護を目的とした範囲や性格を確認する調査（重要遺跡確認調査という。）を実施している。

1990（平成2）年10月に財団法人松山市生涯学習振興財団（現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団）の設立以降は、必要に応じて財団の調査員を招聘し、これらの調査に従事する形式を採用している。平成17年度からは文化庁の承諾を得たうえで、史跡を除く市内一円を対象とした発掘調査や重要遺跡確認調査、及び試掘調査並びに出土物整理作業や報告書編集業務等について財団と松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）との間で委託契約を結び、財団が業務を実施している。

本書掲載の2遺跡は、個人住宅建設に伴う本発掘調査である。遺跡が所在する衣山・久万ノ台地区には低位丘陵が広がり、集落遺跡や古墳のほか生産遺跡などが発見されている。

衣山東組遺跡は衣山地区南方に位置し、松山市文化財包蔵地「№20　永塚古墳」内に所在する。2015（平成27）年9月30日、松山市衣山二丁目326番4地内における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出された。申請地周辺には衣山北組遺跡（平成20年度調査）や衣山大塚遺跡、衣山西ノ岡遺跡（平成22年度調査）、衣山内宮田遺跡（令和元年度調査）のほか、前方後円墳である永塚古墳（昭和59年度調査）や古代瓦の生産窯である衣山窯跡などが存在している。

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、事前の試掘調査を実施することになった。試掘調査は2016（平成28）年1月7日に実施し、柱穴4基と弥生土器片を検出した。

一方、久万山本遺跡は久万ノ台地区の東方に広がる低位丘陵上に立地し、松山市文化財包蔵地「№167　久万ノ台遺物包含地」内に所在する。2017（平成29）年3月9日、松山市久万ノ台1029番、1030番、1031番、1032番、1033番、1035番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出され、それにより、埋文センターは試掘調査を実施した。申請地周辺では久万ノ台遺跡（昭和62年度調査）や久万ノ台古墳（現、愛媛県立松山西中等教育学校）が所在する。2017（平成29）年3月21日（火）、埋文センターは試掘調査を実施し、土坑や柱穴のほか弥生土器や土師器、須恵器を確認した。

二つの調査については、文化財課と各申請者との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、住宅建設によって失われる遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を行うことになった。発掘調査は国庫補助の適用を受け、埋文センターが主体となり、文化財課の協力のもとに実施した。各調査の所在地や調査面積、期間等は表1にて記す。

表１　調査地一覧

調 査 名	調査場所	調査期間	調査面積（㎡）	調査主体
衣山東組遺跡	松山市衣山二丁目326番４の一部	平成28年２月22日～同年３月18日	約75.47	市埋文
久万山本遺跡	松山市久万ノ台1035番の一部	平成29年５月26日～同年６月９日	約24.00	市埋文

第２節　調査・整理の経緯

本書掲載の２遺跡は、平成27年度と29年度に発掘調査を実施した。平成27年度は衣山東組遺跡、平成29年度には久万山本遺跡として屋外調査を行い、調査に伴う整理作業は屋外調査終了後、埋文センター内にて実施した。本格的な報告書作成に伴う整理作業は、埋文センターと文化財課との間で委託契約が締結され、令和３年度と４年度に実施した。令和３年度は４月１日より、報告書作成に伴う出土品の整理や実測、トレース作業を行い、報告書掲載用の遺物写真撮影や写真図版の作成を行った。令和４年度には、図版の割付及び報告書編集業務を行った。

第３節　調査・整理及び編集刊行組織

（１）調査組織

〔平成27年度〕

松山市教育委員会　教育長　山本　昭弘
事務局　局　長　前田　昌一
次　長　隅田　完二
次　長　家串　正治
文化財課　課　長　若江　俊二
主　幹　篠原　昭二

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
理事長　中山　紘治郎
事務局　局　長　中西　真也
次長兼総務部長　紺田　正彦
施設利用推進部　部　長　渡部　広明
埋蔵文化財センター　所長兼考古館長　田城　武志
主　査　山之内　志郎
主　査　梅木　謙一
主　査　橋本　雄一
主　任　山本　健一（調査担当）
嘱　託　大西　朋子（写真担当）

〔平成29年度〕

松山市教育委員会　教育長　藤田　仁
事務局　局　長　津田　慎吾
次　長　家串　正治

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
理事長　中山　紘治郎
事務局　局　長　中西　真也

	次　長	杉本　威		次長兼総務部長	橘　昭司
文化財課	課　長	若江　俊二	文化振興部	部　長	渡部　広明
	主　幹	越智　茂樹	埋蔵文化財センター	所　長	村上　卓也
				考古館長	梅木　謙一
				主　任	水本　完児（調査担当）
				嘱　託	大西　朋子（写真担当）

（2）整理組織

〔令和３年度〕

松山市教育委員会	教育長	藤田　仁	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団		
事務局	局　長	井出　修敏		理事長	本田　元広
	次　長	西村　秀典	事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	横山　憲		次長兼施設管理部部長	杉野　公典
	次　長	横江　茂樹	埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	梅木　謙一
文化財課	課　長	二宮　仁志		主　任	水本　完児
	主　幹	髙橋　秀忠		嘱　託	山本　健一
	副主幹	楠　　寛輝		嘱　託	宮内　慎一
				嘱　託	大西　朋子

（3）編集・刊行組織

〔令和４年10月２日現在〕

【刊行組織】

松山市教育委員会	教育長	前田　昌一
事務局	局　長	鷲谷　浩三
	次　長	石原　英明
	次　長	横山　憲
	次　長	横江　茂樹
文化財課	課　長	二宮　仁志
	主　幹	髙橋　秀忠
	副主幹	楠　　寛輝

【編集組織】

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団		
	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次長兼施設管理部部長兼事業振興部長	宇髙　徹二
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	梅木　謙一
	主　任	水本　完児
	嘱　託	山本　健一
	嘱　託	宮内　慎一
	嘱　託	大西　朋子（写真担当）

【調査・整理作業協力者】

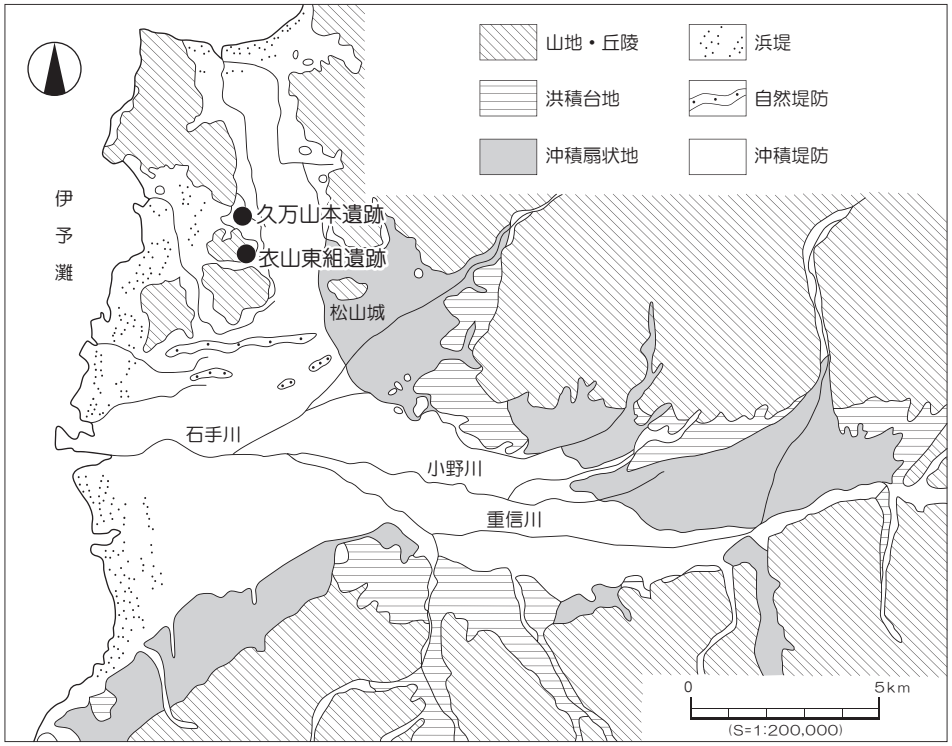
下條　信行（愛媛大学法文学部名誉教授）、田﨑　博之（元愛媛大学法文学部教授）
岸見　泰宏（松山市教育委員会文化財課）、冨田　尚夫（愛媛県歴史文化博物館）

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

松山平野は高縄半島の南西部に位置し、西は伊予灘、北は斎灘に面し、伊予灘に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野南東部を石鎚山系、北部を高縄山系に挟まれ、平野中央部には東西方向に西流する重信川とその支流が合流しながら伊予灘に注いでいる。平野の範囲はおおよそ東西約 20km、南北約 17kmを測り、これら河川の沖積作用による扇状地堆積物や氾濫原堆積物、三角州堆積物等で形成されている。

本書で報告する衣山東組遺跡・久万山本遺跡が所在する衣山・久万ノ台地区は、松山平野北西部の丘陵地に位置し、太山寺山塊の南麓、久万ノ台・衣山丘陵を中心に広がる丘陵及び低地である。この丘陵は標高約 15 ～ 20m の低丘陵で南北に細く延びており、その南裾付近に本遺跡は所在する。地質学的には、その大部分を中世代の領家貫入岩類の花崗閃緑岩によって構成される花崗岩地帯である（第１図）。



第１図　松山平野の地形分布図

第２節　歴史的環境（第２・３図）

衣山・久万ノ台地区は松山平野西部に位置しており、ここでは、平野北部から地区南部、大峰ケ台丘陵が所在する斎院地区における主要遺跡と同地区内で実施した遺跡を中心に、概観する。

縄文時代

大峰ケ台丘陵の南側に広がる平野部には古照遺跡があり、灌漑用の堰を覆う砂礫層からは縄文時代後期の土器が出土しているが､これらは旧宮前川の氾濫により運ばれたものと考えられている。また、平野北部における縄文時代遺跡では大渕遺跡と船ケ谷遺跡がある。大渕遺跡からは後期から晩期にかけての遺物が大量に出土しており、とりわけ、晩期後半の遺物包含層中からは石庖丁や石鎌のほかに籾圧痕土器などが出土し、初期稲作を証明する遺物が注目される。また、ナスビ状の文様が施された彩文土器は大陸からの新しい文化の伝播を伺わせる貴重な資料である。船ケ谷遺跡では刻目凸帯文期に先行する土器や石器、木器が建物や河川、杭列等の遺構とともに出土している。

弥生時代

大峰ケ台丘陵の東裾部にある朝美澤遺跡２次調査からは、包含層中より弥生時代前期前半の遺物がまとまって出土しており、松山平野における弥生前期土器編年の指標となっている。中期では大峰ケ台遺跡４次調査より中葉の竪穴建物が検出され、後期では朝美澤遺跡１次調査より壺棺墓３基が検出されている。衣山地区では、丘陵南麗にある衣山北組遺跡から掘立柱建物址が検出されており、建物は２間×２間以上の総柱構造で､建物を構成する柱穴は布掘り状の掘り方をもつ。建物の構築時期は、弥生時代後期中葉である。また、衣山大塚北遺跡からは後期後半の竪穴建物が検出され、衣山西ノ岡遺跡２次調査では同時期の土坑が検出されている。このほか、衣山丘陵に所在する永塚古墳や衣山西ノ岡古墳からは、周溝内より後期後半から終末期の土器が出土している。久万ノ台地区では野津子山遺跡検出の包含層中より後期後半の土器片が出土しており、該期における集落の存在が示唆されている。

古墳時代

前期では、古照遺跡より灌漑用の堰が発見されている。近年では、衣山丘陵上の衣山内宮田遺跡より一辺 4.7 m以上の方形竪穴建物が検出されている。

中期から後期の遺跡は平野北部に位置する船ケ谷遺跡４次調査があり、自然流路内からは該期の遺物が大量に出土している。この中には陶質土器や非陶邑系須恵器が含まれており、朝鮮半島系の文化を受け入れた地域であったと考えられている。衣山丘陵上では、衣山大塚北遺跡より７世紀前半に位置付けられる竪穴建物が検出されている。建物にはカマドが付設され､煙道の一部が確認されている。また、前述の野津子山遺跡からは古墳時代の土坑が報告されている。

古墳の分布をみると、大峰ケ台丘陵や衣山・久万ノ台丘陵上に数多く存在している。前期古墳としては、大峰ケ台丘陵北西麗で発見された朝日谷２号墳が挙げられる。同古墳は平野最古の前方後円墳のひとつであり、青銅鏡や鉄刀、鉄剣、鉄鏃、銅鏃などが出土している。また、同丘陵西麗上に所在

1 衣山東組遺跡	2 久万山本遺跡	3 古照遺跡	4 大渕遺跡
5 船ケ谷遺跡 1 次調査	6 朝美澤遺跡 2 次調査	7 大峰ケ台遺跡 4 次調査	8 朝美澤遺跡 1 次調査
9 衣山北組遺跡	10 衣山大塚北遺跡	11 衣山西ノ岡遺跡 2 次調査	12 永塚古墳
13 衣山西ノ岡古墳	14 野津子山遺跡	15 衣山内宮田遺跡	16 船ケ谷遺跡 4 次調査
17 朝日谷 2 号墳	18 大峰ケ台遺跡 9 次調査	19 客谷古墳群	20 久万ノ台古墳
21 朝美澤廃寺	22 衣山瓦窯跡	23 久万ノ台遺跡	24 南江戸桑田遺跡

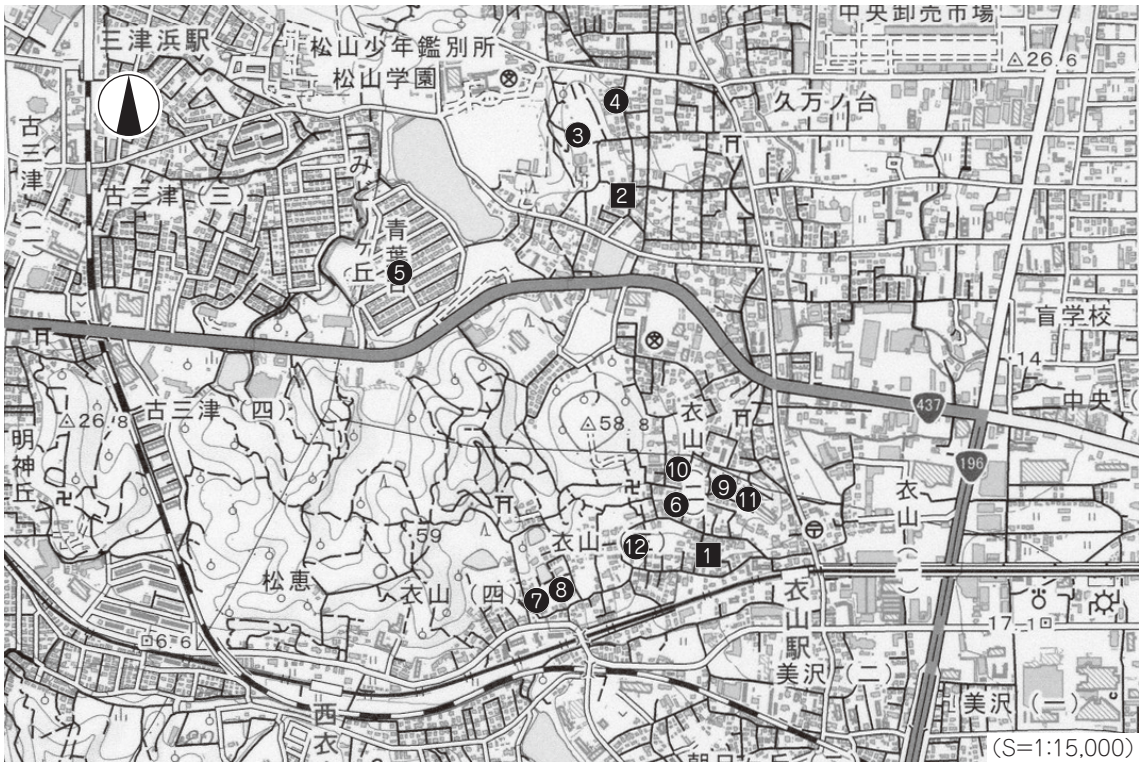
第２図　周辺遺跡分布図

する大峰ケ台遺跡９次調査からは、大池東５号墳が検出されている。一辺約13ｍの方墳で、鉄剣や鉄鏃、鉋、ガラス玉等が出土している。

中期では大峰ケ台丘陵上にて、直径11～13ｍの周溝を伴う古墳２基（大池東３号墳・４号墳）が築造され、周溝内から多量の埴輪が出土している（5世紀後半）。後期になると、大峰ケ台丘陵上には客谷古墳群があり、横穴式石室を主体部にもつ古墳が広く分布している。一方、衣山丘陵上には後期中葉から後半の古墳が築造される。丘陵南斜面上には衣山西ノ岡古墳があり、周溝内より６世紀中葉に時期比定される完形の須恵器や埴輪（円筒・形象）が数多く出土している。また、永塚古墳は６世紀後半の築造とされる推定全長28ｍを超える前方後円墳で、当地域の首長墓と考えられている。久万ノ台地区では、６世紀後半の築造とされる久万ノ台古墳（３号墳）や７世紀前半の築造とされる久万ノ台古墳（１号墳）が所在し、完形の須恵器のほかに玉類や耳環、鉄器、馬具が出土している。

古　代

大峰ケ台丘陵北東麗では平安時代の寺院跡の一部が確認され、朝美澤廃寺と呼ばれている。衣山地区では大正14年、鈴木栄一郎氏により衣山瓦窯跡の発掘調査が実施され、窯跡内や周辺からは軒丸瓦や軒平瓦、丸瓦などが出土している。窯跡は焚口、燃焼部、焼成部からなる平窯で、燃焼部が３本のロストルと４本の火焔道で構成されている。なお、操業期間は、奈良時代後半から平安時代後半とされている。



1 衣山東組遺跡　2 久万山本遺跡　3 久万ノ台古墳　4 久万ノ台遺跡
5 野津子山遺跡　6 衣山北組遺跡　7 衣山西ノ岡古墳　8 衣山西ノ岡遺跡２次調査
9 衣山大塚北遺跡　10 衣山内宮田遺跡　11 永塚古墳　12 衣山瓦窯跡

第３図　衣山・久万ノ台地区の遺跡分布図

表２　衣山・久万ノ台地区の遺跡一覧

No	調査名	種別	検出遺構	出土遺物	調査年度	調査主体
1	衣山東組遺跡	国補	掘立１棟（古代末～中世初）・溝１条（近世）	土師(古墳～近世)・須恵器(古墳)・瓦（奈良～平安）・銭貨・石硯	H27	市埋文
2	久万山本遺跡	国補	竪穴１棟(弥生)・土坑６基(弥生)・溝１条(弥生)・柱穴(弥生～古墳)	弥生（後期～末）・土師（古墳～奈良）・須恵 (古墳)・石器	H29	市埋文
3	久万ノ台古墳	民間	円墳２基（横穴式石室）	土師（古墳）・須恵（古墳）・玉類・耳環・鉄器・馬具	S48	市教委
4	久万ノ台遺跡	民間	掘立２棟（古代）・溝９条（古墳～中世）・柱穴 94 基	弥生（前期・中期中葉・後期～末）・土師(古墳～鎌倉)・須恵(古墳)	S62	市教委
5	野津子山遺跡	民間	土坑７基（古墳）	弥生（後期）、須恵（古墳）	H3	市埋文
6	衣山北組遺跡	国補	掘立１棟（弥生）・土坑１基（弥生）・柱穴 67 基	弥生（中期～後期）・土師（古墳）・須恵（古墳）・鉄器	H20	市埋文
7	衣山西ノ岡古墳	民間	円墳１基（古墳）・土坑７基（古墳・近世）・溝１条（近世）	弥生（後期～末）・土師（古墳～室町）・須恵（古墳～平安）・陶磁器（近世）・埴輪	H22	市埋文
8	衣山西ノ岡遺跡２次調査	民間	竪穴１棟（古墳）・溝９条（近世）・土坑２基（弥生）・柱穴４基	弥生（後期）・土師（古墳～近世）・須恵（古墳）・陶磁器（古代）・瓦（奈良）	H26	市埋文
9	衣山大塚北遺跡	民間	竪穴２棟（弥生・古墳）・土坑（古墳）・溝１条（古墳）・柱穴 14 基	弥生(後期)・土師(古墳)・須恵(古墳)	H23	市埋文
10	衣山内宮田遺跡	民間	竪穴１棟(古墳)・溝２条(古墳)・土坑 27 基（弥生～中世）・柱穴 73 基	弥生（後期）・土師（古墳～鎌倉）・須恵（古墳～奈良）	R1	市埋文
11	永塚古墳	民間	前方後円墳１基（主体部は不明）	弥生（後期～末）・土師（古墳）・須恵（古墳）・瓦・玉類・耳環・鉄器・馬具	S59	市教委
12	衣山瓦窯跡	民間	平窯	瓦（奈良～平安）	T14	個人

衣山・久万ノ台地区では、既往の調査において古代から中世における明確な遺構の検出事例は極めて少ない。衣山地区では前述の衣山内宮田遺跡より、柱穴内より奈良時代の須恵器が出土している。また、衣山西ノ岡古墳や衣山西ノ岡遺跡２次調査からは周溝や包含層中より奈良時代から平安時代の遺物が出土している。このほか、永塚古墳からは平安時代の土器片が出土している。久万ノ台地区では久万ノ台遺跡において、古代の建物址や包含層中より奈良時代の遺物が出土している。

中　世

斎院地区内では道路建設工事や河川改修工事等に伴う発掘調査が数多く実施され、主に中世段階の水田や畑址が報告されている。

衣山西ノ岡古墳検出の周溝内からは鎌倉時代の瓦器碗が出土し、衣山内宮田遺跡では包含層中より土釜片が出土している。また、久万ノ台遺跡からは中世の溝が検出されている。

近　世

大峰ケ台丘陵東麗にある南江戸桑田遺跡からは近世墓地が発見され、良好な遺存状態の人骨が確認されている。衣山地区では衣山西ノ岡古墳の調査において、江戸時代後期の土坑が検出され、該期の陶磁器が出土している。また、衣山西ノ岡遺跡２次調査からは江戸時代後期の溝が報告されている。

【参考文献】

松山市教育委員会　1974　『古照遺跡』
栗田　茂敏　2000　『大渕遺跡－１・２次調査－』松山市文化財調査報告書　第 77 集
阪本　安光　1984　『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会
宮内　慎一　1992　「朝美澤遺跡２次調査」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市文化財調査報告書　第 29 集
栗田　茂敏　1995　『大峰ケ台遺跡－第４次調査－』松山市文化財調査報告書　第 48 集
松村　淳　1994　「朝美澤遺跡１次調査地」『大峰ケ台丘陵の遺跡』松山市文化財調査報告書　第 40 集
山之内　志郎　2016　「衣山北組遺跡」『衣山北組遺跡・谷町遺跡２次調査』松山市文化財調査報告書　第 183 集
相原　浩二　2016　「衣山大塚北遺跡」『衣山西ノ岡古墳・衣山大塚北遺跡』松山市文化財調査報告書　第 185 集
水本　完児　2015　「衣山西ノ岡遺跡２次調査」松山市埋蔵文化財調査年報 27
栗田　茂敏　2013　「永塚古墳」『福角２号墳・永塚古墳・御産所権現山古墳』松山市文化財調査報告書　第 160 集
水本　完児　2016　「衣山西ノ岡古墳」『衣山西ノ岡古墳・衣山大塚北遺跡』松山市文化財調査報告書　第 185 集
武正　良浩　1993　「野津子山遺跡」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市文化財調査報告書　第 32 集
作田　一耕　2020　「衣山内宮田遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報 32

高尾　和長　2002　『船ケ谷遺跡－４次調査－』松山市文化財調査報告書　第88集
梅木　謙一　1998　『朝日谷２号墳』松山市文化財調査報告書　第63集
高尾　和長　1998　『大峰ケ台遺跡Ⅱ－９次調査－』松山市文化財調査報告書　第62集
松村　淳　1994　「客谷古墳群Ｂ地区」『大峰ケ台丘陵の遺跡』松山市文化財調査報告書　第40集
森　光晴　1976　「久万ノ台古墳」『御産所11号古墳・忽那山古墳・久万ノ台古墳』松山市文化財調査報告書　第９集
岡田　敏彦　1996　『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
吉本　拡　1982　「衣山瓦窯跡」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ』
宮内　慎一　1993　「久万ノ台遺跡」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市文化財調査報告書　第32集
梅木　謙一　2005　「南江戸桑田遺跡」『宮前川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書　第102集

第３章　衣山東組遺跡

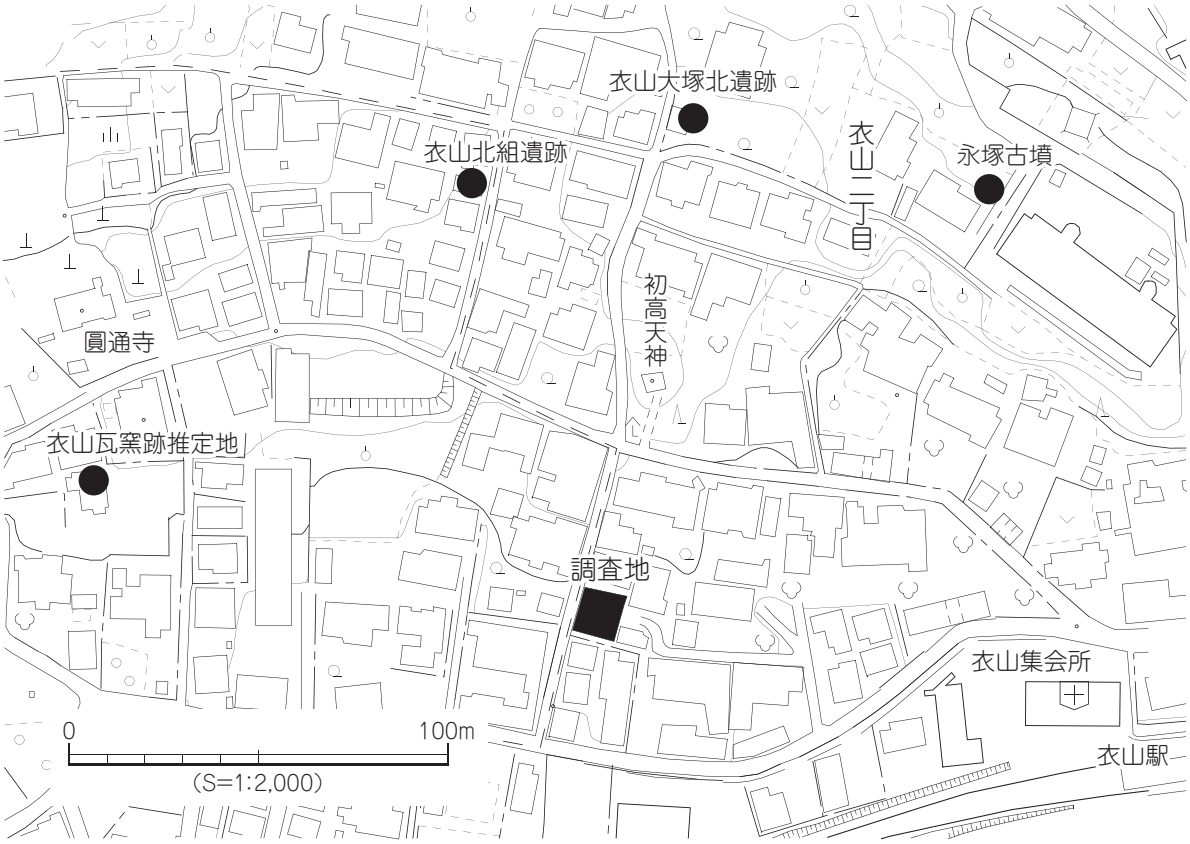
第１節　調査の経緯

調査地は松山平野西部、衣山地区の低位丘陵上、標高約 19m に立地し、松山市埋蔵文化財包蔵地「No.20　永塚古墳」内に位置する。周辺の遺跡には調査地の北東側に前方後円墳である永塚古墳、北側に衣山大塚北遺跡、衣山北組遺跡、衣山内宮田遺跡があり、西側には衣山西ノ岡古墳、衣山西ノ岡遺跡２次調査地のほか衣山瓦窯跡（調査推定場所）が確認されている。このうち、衣山北組遺跡では弥生時代から古代の遺構と遺物を検出している。なかでも、弥生時代後期に属する布掘りの掘方をもつ掘立柱建物址は、当時の集落における中心施設の可能性が考えられ、付近一帯には弥生時代から古墳時代における集落の存在が確認されている。

事前に実施した試掘調査では柱穴４基を検出し、遺物は弥生土器と考えられる土器片が出土した。これらのことから、弥生時代以降の集落について、その範囲や性格確認を主目的とした本格調査を実施した。調査地は緩傾斜地に立地しているため、標高の高い部分は切土が行われ削平されていた。発掘調査は、平成 28（2016）年２月 22 日より開始した。以下、調査工程を略記する。

２月 22 日（月）：重機にて、表土層除去作業を行う。
２月 24 日（水）：掘削残土の除去、調査区壁面の掘削作業を行う。
２月 25 日（木）：遺構検出、撹乱土の除去、遺構認定作業を行う（３月１日終了）。
３月　２日（水）：遺構検出状況の写真撮影、遺構掘削、撹乱土の除去作業を行う。
３月　３日（木）：遺構掘削、撹乱土の除去、調査区壁面土層測量作業を行う。
３月　７日（月）：遺構掘削、遺構認定、調査地の測量作業を行う。
３月　８日（火）：遺構認定後の遺構検出状況写真の撮影、柱穴の掘削、遺構検出面の精査作業、調査区全体の測量作業を行う。
３月 11 日（金）：柱穴の掘削、写真撮影、測量作業を順次行う。
３月 15 日（火）：検出した遺構の掘削、測量、写真撮影を終え、調査作業は終了した。
３月 16 日（水）：仮置き掘削土の移動、埋め戻し作業を人力にて行う。
３月 17 日（木）：重機にて、調査区の埋め戻し作業を完了する。
３月 18 日（金）：発掘機材のかたづけ、出土遺物の洗浄、図面整理作業を行う。現地にて松山市教育委員会文化財課担当者とともに最終確認をし、調査地の引き渡しを行い発掘調査を完了する。

調 査 名：衣山東組遺跡
調査場所：松山市衣山二丁目 326 番４の一部
調査面積：約 75.47㎡
調査期間：2016（平成 28）年２月 22 日（月）～同年３月 18 日（金）
調査担当：公益財団法人松山市・文化スポーツ振興財団埋蔵文化財センター　主任　山本　健一



第４図　調査地位置図

第２節　層　位（第５図、図版１）

調査地は、調査以前は既存建物を撤去した更地であった。現況の標高は、19.80ｍ前後である。調査で確認した土層は、以下の５種類である。

第Ⅰ層：暗灰色土（10Y 4/1）〔整地土〕調査区全域にみられ、厚さ 14 ～ 42㎝を測る。

第Ⅱ層：黄灰色土（2.5Y 5/1）〔造成土〕調査区全域にみられ、厚さ 10 ～ 27㎝を測る。

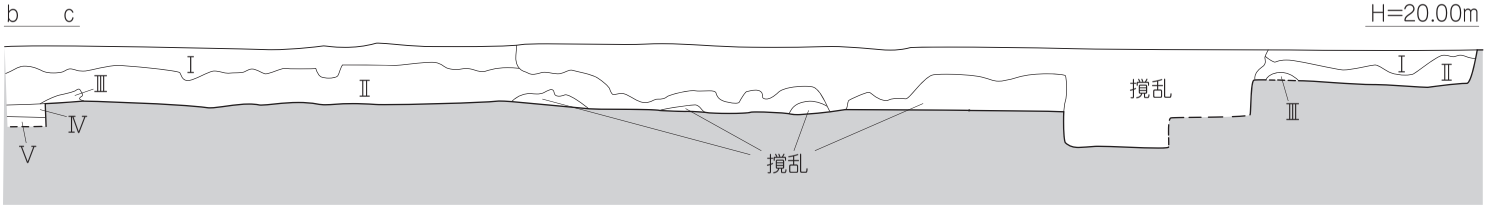
第Ⅲ層：白色微粘性土（N 8/）〔地山層 1〕近現代の撹乱により残存していない部分があるが、調査地中央部分にやや多く残る。厚さは、5 ～ 30㎝を測る。本層中からは、遺物は出土していない。本層上面にて、遺構検出作業を行う。

第Ⅳ層：黄色粘土（10YR 8/8）〔地山層 2〕本層も撹乱、削平により部分的に残存している。厚さは、5 ～ 10㎝を測る。本層中からは、遺物は出土していない。

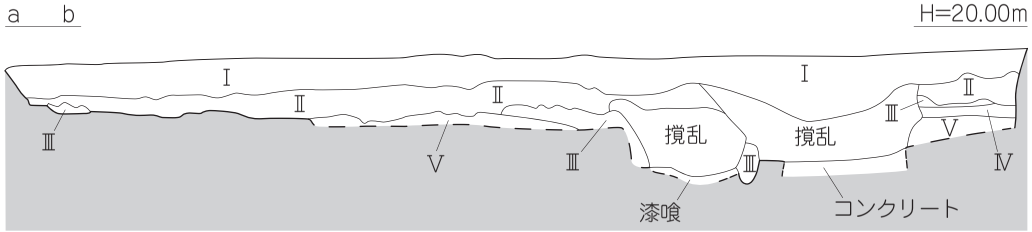
第Ⅴ層：赤橙色砂礫混土（10R 6/8）〔地山層 3〕厚さは西壁では 17㎝まで確認したが、撹乱土坑基底部においても本層が確認されたため層厚は 27㎝以上と思われる。本層中からは、遺物は出土していない。

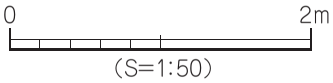
土層堆積状況から調査地全域は、ほぼ水平に切土され現代の撹乱を多く受けていたと考えられる。なお、調査にあたり調査区内に４ｍ四方のグリッドを設定した。北から南方向へ A、B、C、西から東へ 1、2、3、4 とグリッド名を付した。なお、北壁・西壁土層図（第５図）のポイントａ～ｃは遺構配置図（第６図）に記している。

〔北壁〕



〔西壁〕





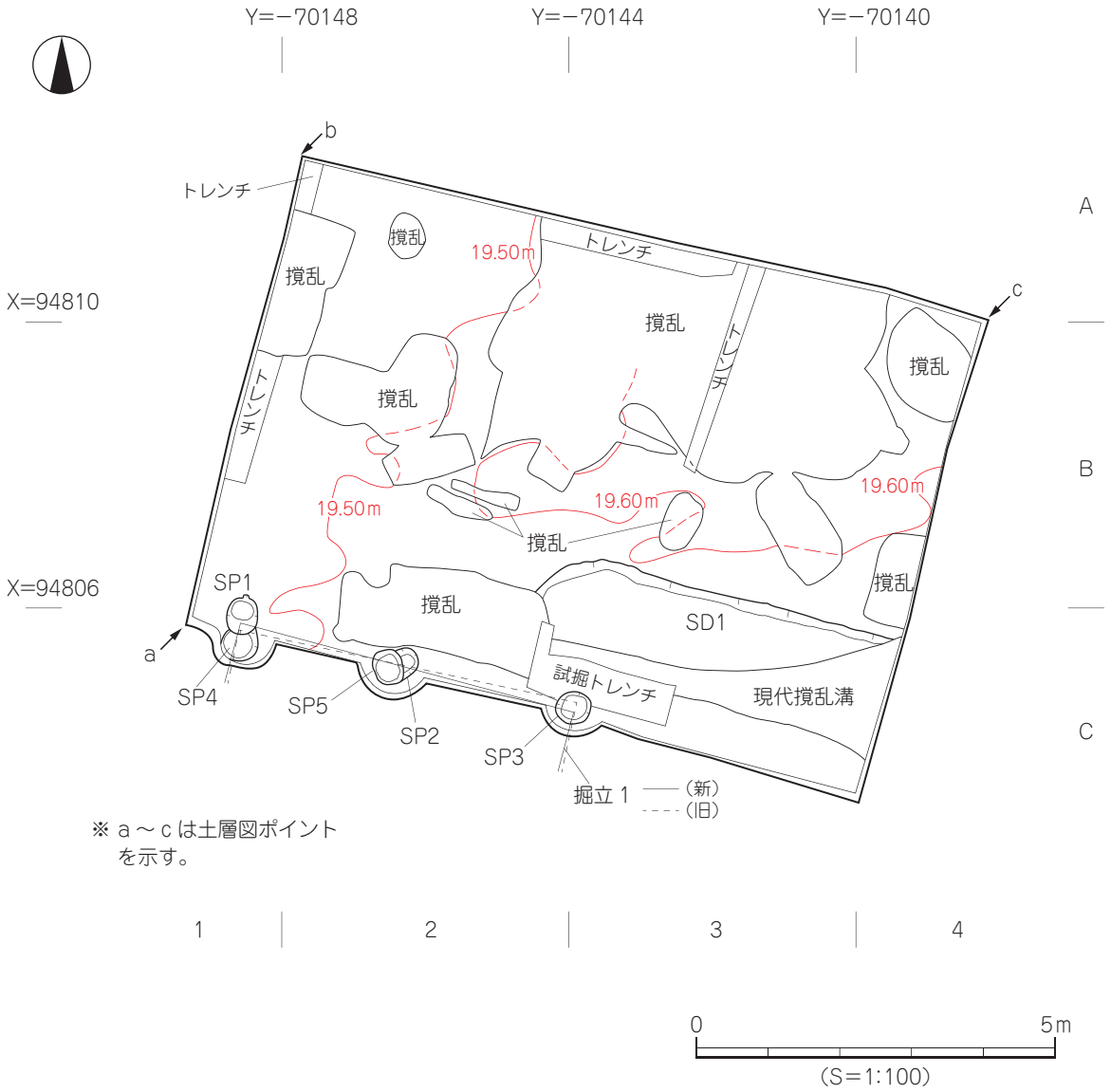
Ⅰ　暗灰色土（10Y 4/1）〔整地土〕
Ⅱ　黄灰色土（2.5Y 5/1）〔造成土〕
Ⅲ　白色微粘性土（N 8/ ）〔地山 1〕
Ⅳ　黄色粘土（10YR 8/8）〔地山 2〕
Ⅴ　赤橙色砂礫混土（10R 6/8）〔地山 3〕

第５図　北壁・西壁土層図

第３節　遺構と遺物

調査では掘立柱建物址１棟（柱穴５基を検出）と溝１条を検出した（第６図）。遺物は、これら遺構内より弥生土器、土師器、須恵器、古代瓦、かわらけが出土した。また、撹乱土中より石製硯や銭貨を採集した。

本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報 28』に概要を報告しているが、整理作業の結果、遺構認定及び名称が異なっており、取り扱いには注意していただきたい。



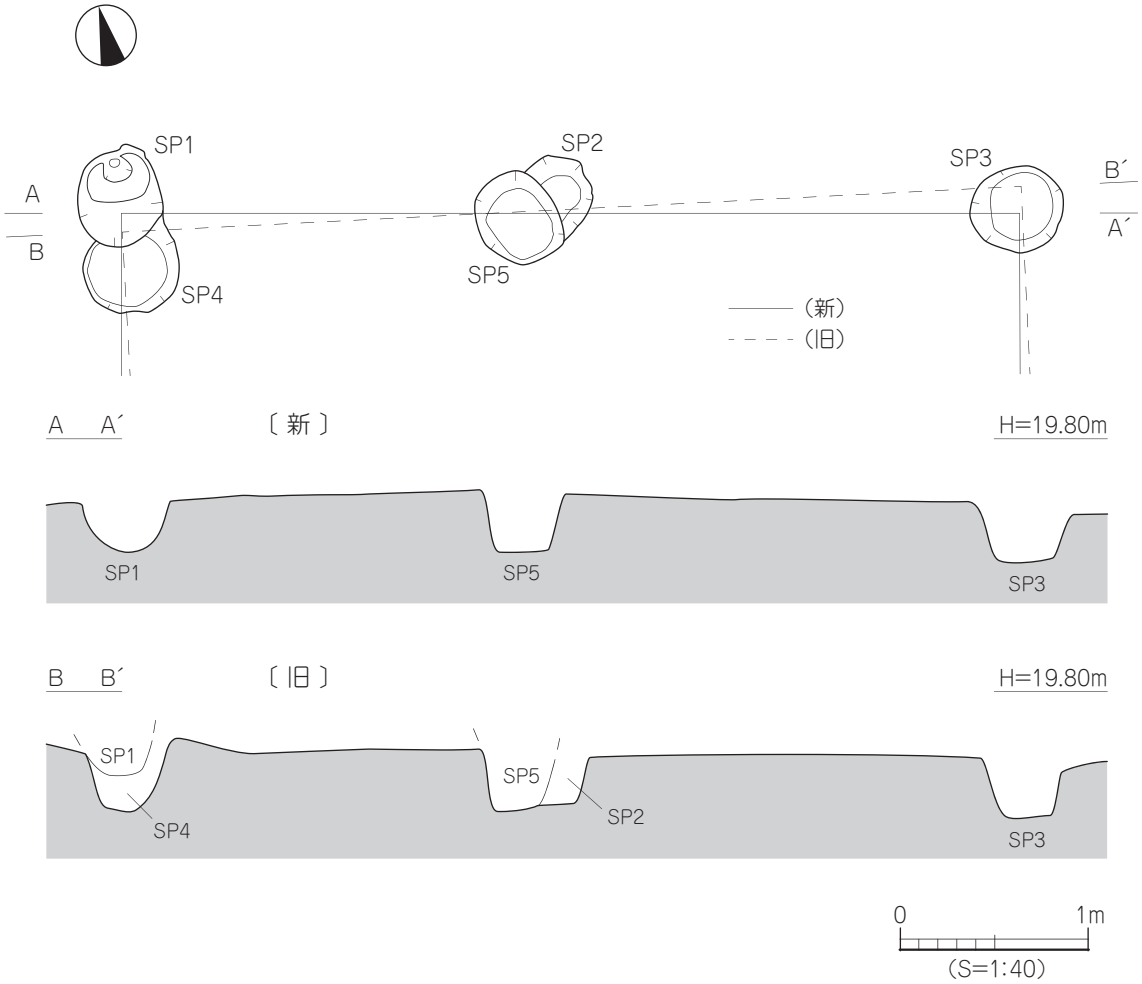
第６図　遺構配置図

1．掘立柱建物址

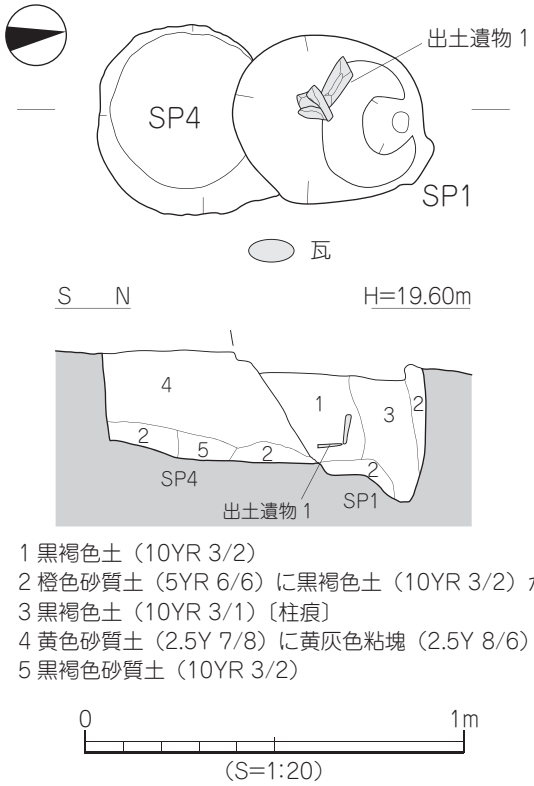
掘立１（第７～10図、図版１～５）

調査地南端西寄りのB1～C3区に位置する。建物全体の検出には至っていないが、詰石や根詰石が使用された柱穴構造により建物址と判断した。西側柱２本の柱穴には切り合いが見られ、建物を建て替えている。建物址は､新･旧とも東西方向で２間分を検出した。建物址（新）の方向は東西方向で、約14度南に偏している。柱間は西側より2.10m､2.65mを測り､東側が0.55m広い。建物址（旧）は、東西方向より約12度南に偏している。柱間は西側より2.30m、2.45mを測り、東側が0.15m広いが、建物址（新）よりは柱間間隔は揃っている。建物址の規模は（新）･（旧）とも東西長4.75ｍを測る。柱列の東側延長部では柱穴は検出されなかったため、SP3は北東隅柱と考えられる。

各柱穴の平面形態は円～楕円形で、規模は径40～50㎝、深さ26～37㎝を測る。柱穴埋土は、黒褐色土（10YR 3/2）を基調とする。SP4は抜き取り跡と思われ、黄色砂質土（2.5Y 7/8）で埋まる。遺物はSP1～SP4の埋土中より詰石や根詰石に転用された瓦片が出土した｡図化には至っていないが、弥生土器、土師器、須恵器の小片も出土している。建物址の性格は、不明である。



第７図　掘立１測量図



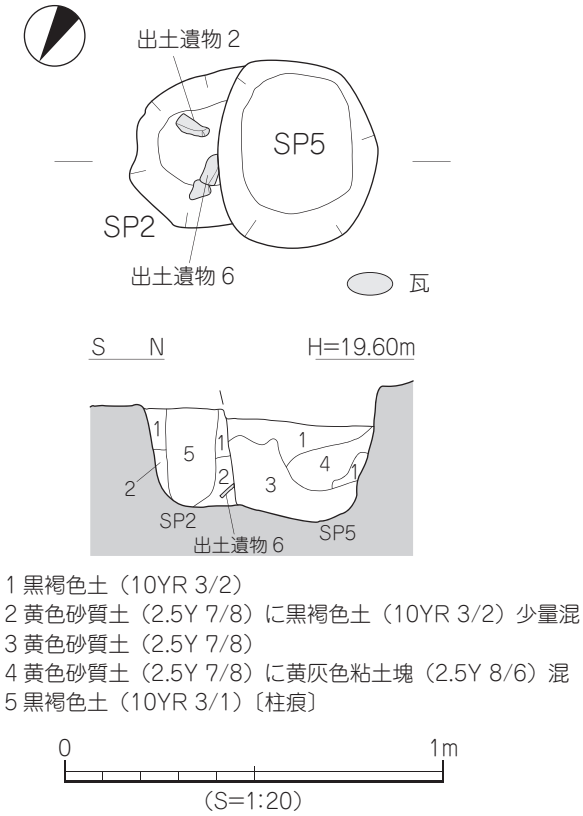
第 8 図　SP1・SP4 測量図

第 9 図　SP3 測量図

出土遺物（第 11・12 図、図版 7・8）

1 ～ 6 は瓦片で、1・2 は軒平瓦、3 ～ 5 は平瓦、6 は丸瓦である。

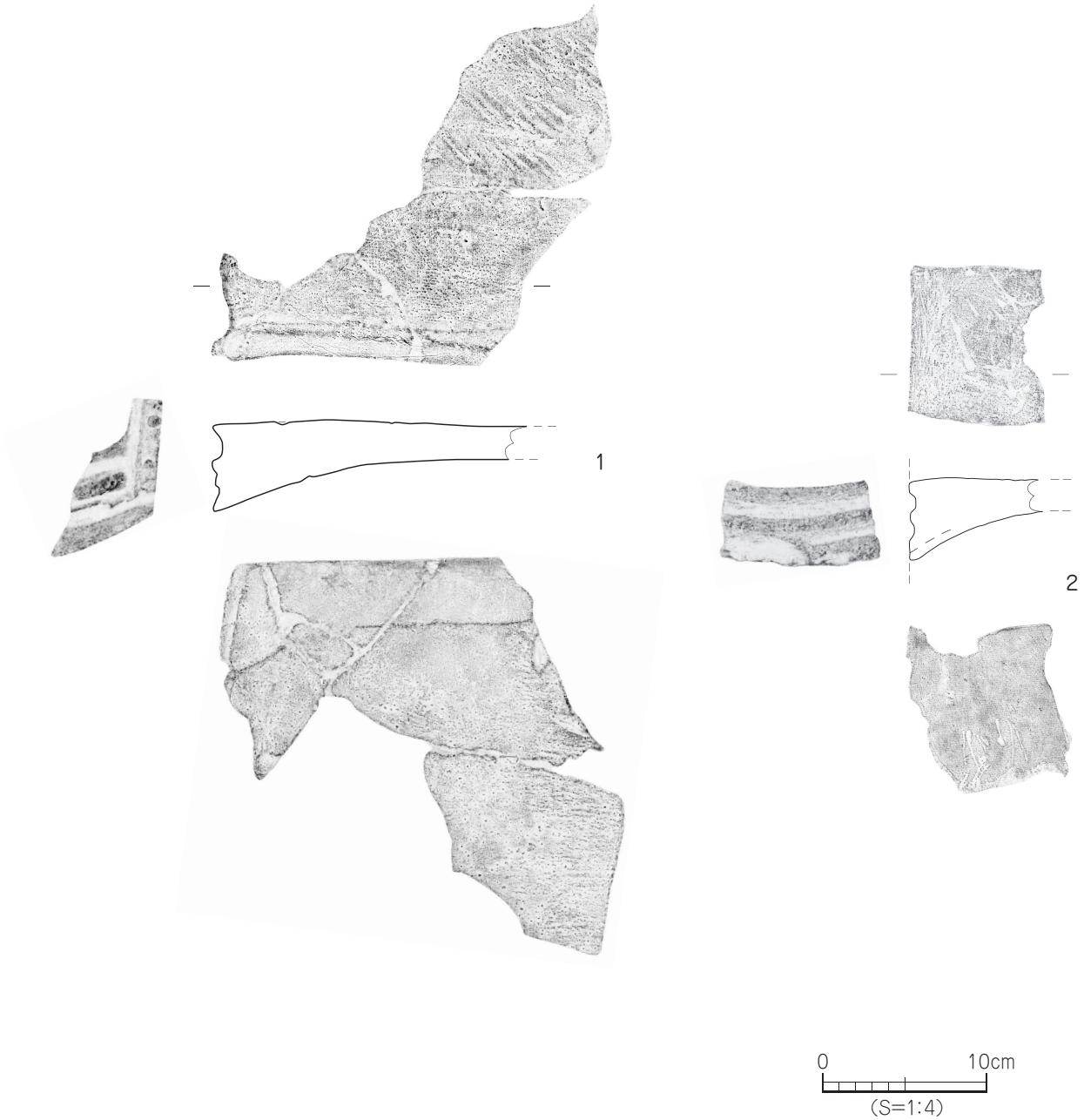
1 は軒平瓦で、SP1 より出土した。凹面端部は折れ曲がり上方へ伸び、上面に面をもつが、瓦当面は一部しか残存していない。顎は、曲線顎をなす。瓦当面の文様は不明であるが、外区外縁には珠文が付く。凹面は布目、凸面は布目擦り消し後、細縄タタキ痕が観察できる。平瓦部の厚さは、2.2cmを測る。2 は軒平瓦で、SP2 より出土した。曲線顎の三重弧文であり、凹面は布目が残り、凸面はハケ調整後ナデ調整されている。厚さは瓦当面で 4.7cm、平瓦部で 2.0cmを測る。3 は平瓦片で、SP3 より出土した。小口面の切断は凹凸面に



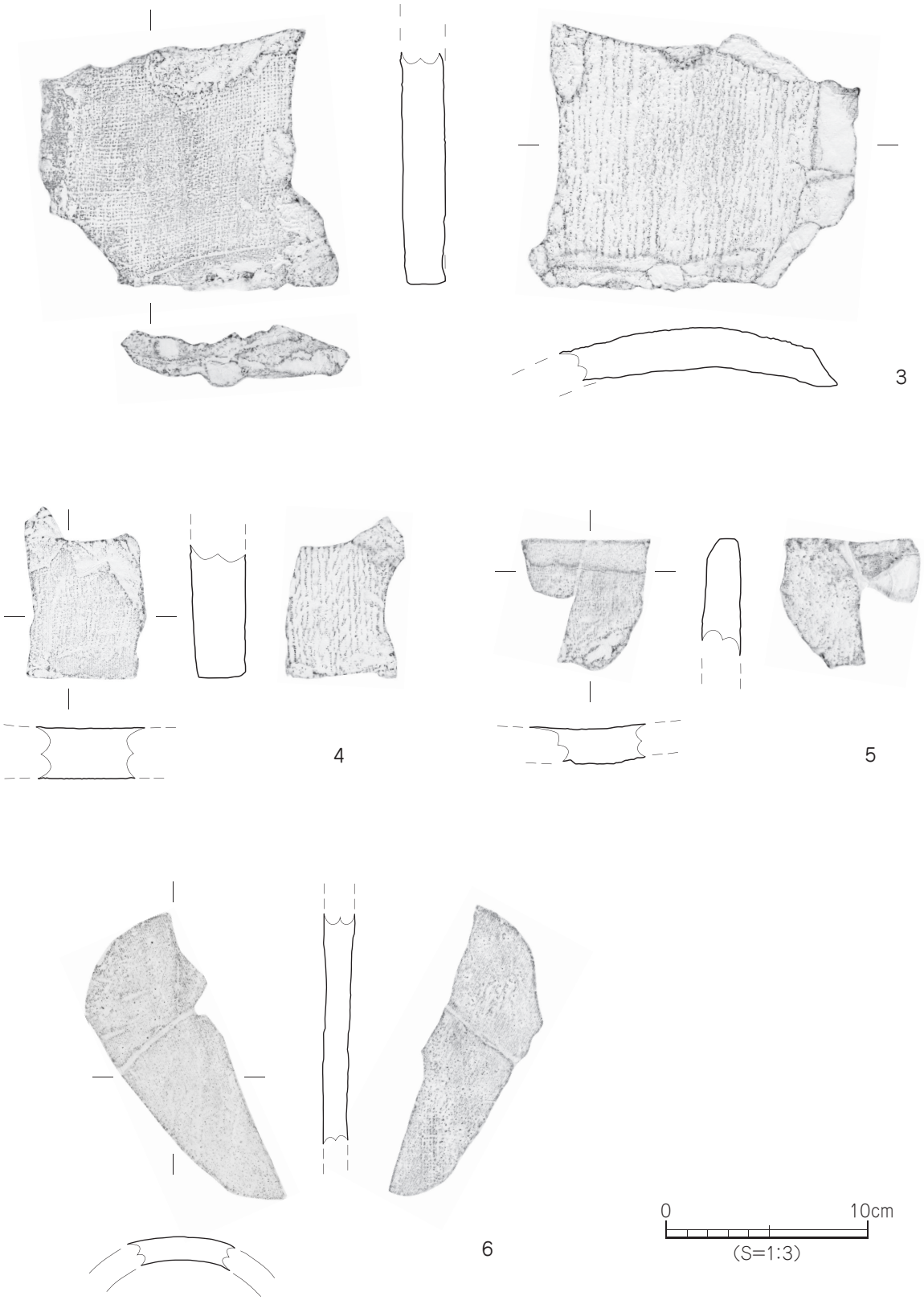
第 10 図　SP2・SP5 測量図

対して直角であるが、縦方向は斜めにヘラ切りされている。凹面は布目、凸面は細縄タタキ痕が残り、ハナシ砂を施している。厚さは、2.1cmを測る。4 は小口面が残る平瓦片で、SP4 より出土した。凹面は布目、凸面は細縄タタキ痕が残り、厚さ 2.7cmを測る。5 は平瓦片で、SP1 より出土した。上端部片で、端部は凹面側に面取りが施されている。凹面は布目、凸面は細縄タタキ痕が残り、厚さ 1.9cmを測る。6 は丸瓦片で、SP2 より出土した。凹面は布目、凸面はハケ調整後ナデ調整されており、厚さ 1.5cmを測る。

時期：時期決定に至る土器の出土はないが、古代瓦が詰石、根詰石に転用されていたことから古代末から中世初頭と考える。



第 11 図　掘立 1 出土遺物実測図（1）



第 12 図　掘立 1 出土遺物実測図（2）

2．溝

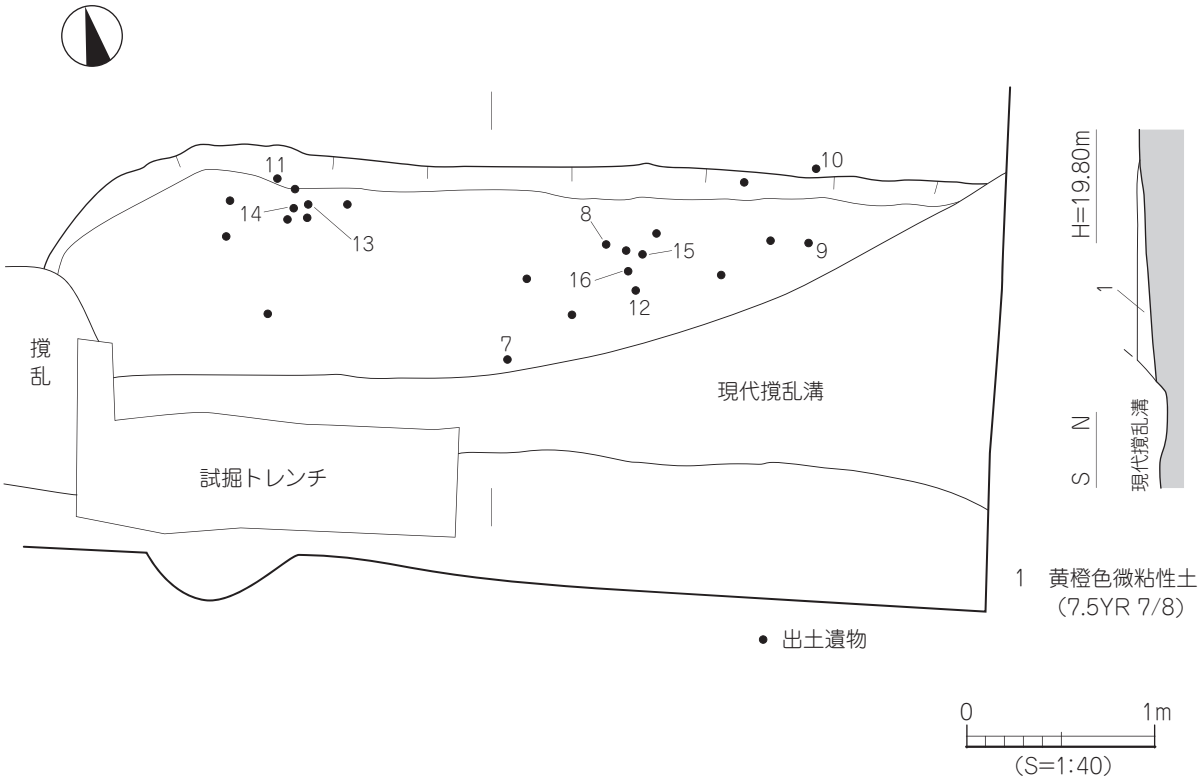
SD1（第 13 図、図版 6）

調査地南東部、B2 ～ C4 区に位置する東西方向の溝である。溝の南肩は、現代の撹乱溝により消滅している。規模は検出長 4.96 m、幅 1.20 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は、黄橙色微粘性土（7.5YR 7/8）の単一層である。遺物は溝の全体より土師皿（かわらけ）が出土したが、その場で圧し潰された状態のものも確認できた。出土した土師器は、大半が皿であるが、土瓶が 1 点出土している。

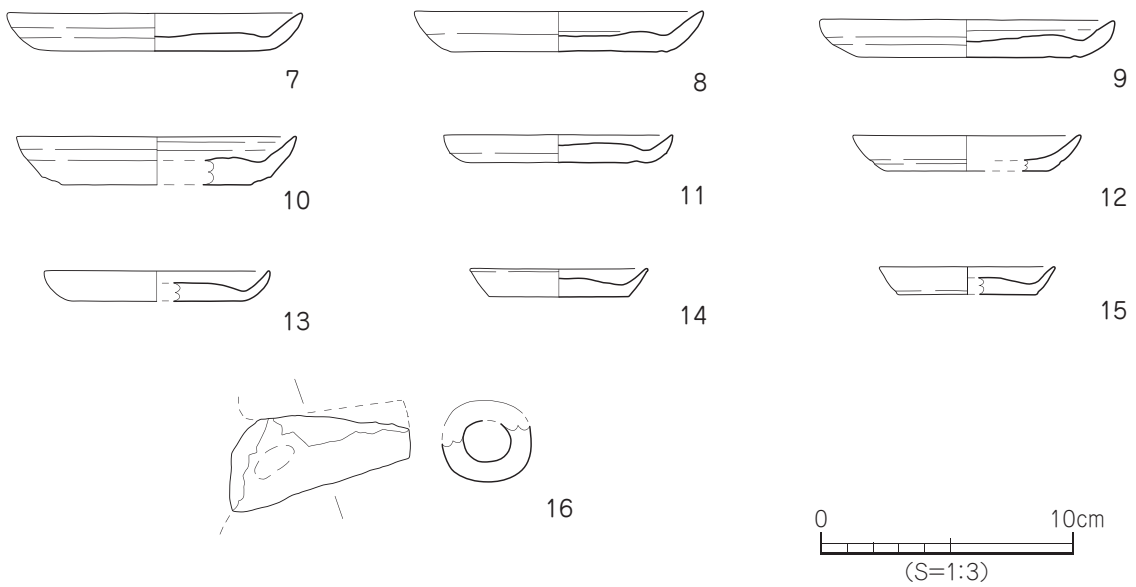
出土遺物（第 14 図、図版 9）

7 ～ 16 は土師質土器で、7 ～ 15 は皿、16 は土瓶である。皿は口径の違いにより、3 種類に分類できる。7 ～ 10 は口径が 11.0 ～ 11.6cm内におさまり、器高は 7・9 が 1.5cm、8 が 1.6cm、10 は 1.9cmを測る。11 ～ 13 は口径が 9.0 ～ 9.1cm内におさまり、器高は 11 が 1.1cm、12 が 1.4cm、13 が 1.2cmを測る。14・15 は、ともに口径 7.0cm、器高 1.1cmを測る。口径の大きさに違いはあるが、外傾して立ち上がる口縁部、底部糸切り離しなどの製作技法は同じである。16 は土瓶の把手部と考えられ、胴部接合部には剝離がみられる。内面には粘土紐を巻き上げての成形がみられ、胎土は皿の胎土と酷似していて精良である。

時期：出土した土師器皿の形態より、中世末から近世と考える。



第 13 図　SD1 測量図



第 14 図　SD1 出土遺物実測図

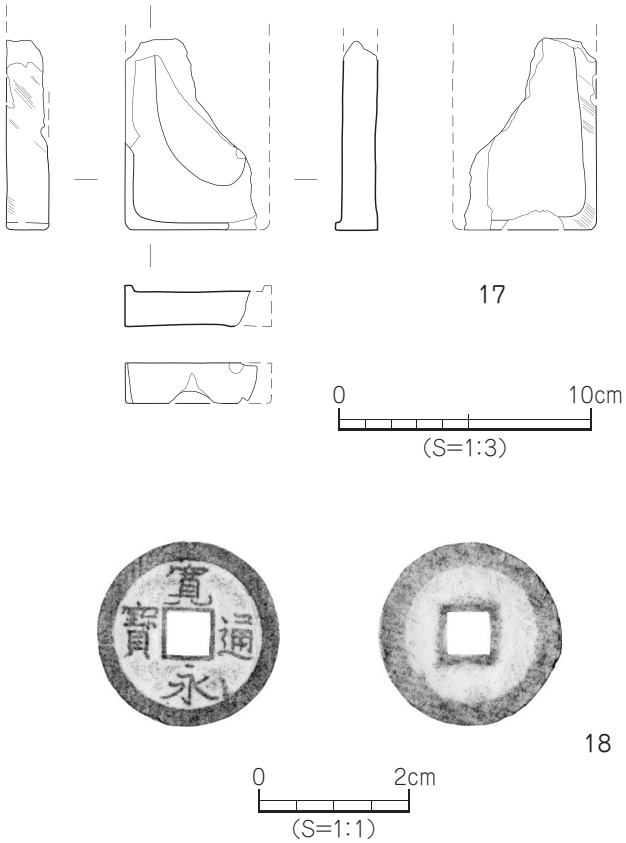
3．撹乱出土遺物

17・18 は、撹乱土中より採集した。

出土遺物（第 15 図、図版 9）

17 は石製硯、18 は銅製銭貨である。17 は残存長 7.6cm、残存幅 5.2cm、高さ 1.7 cmを測る。上部内底面には、使用痕が顕著に残る。底部外面には縁を削り取った痕があり、作り直して使用したものと考える。

18 は、銅製の寛永通宝である。周縁外径 2.40cm、周縁内径 1.90cm、孔 0.55cm、厚さ 0.11cm、重量 3.0g を測る。新寛永銭。



第 15 図　撹乱出土遺物実測図

第４節　小　結

今回の調査では、古代末から近世の遺構と遺物を検出した。調査地は緩斜面上に位置し、現代の住宅建設などにより調査区南端部以外は削平と撹乱を強く受けていた。このような状況で、平安時代末から中世初頭の掘立柱建物址や中世末から近世の溝や、弥生時代から近世までの遺物を確認した。

１．層　位

調査で確認した土層は５種類あり、上位の二層は近現代の整地層や造成土であった。また、調査区も、大半が切り土や撹乱を受けていた。残存は少なかったが、第Ⅲ層（地山層１）白色微粘性土が確認できた。この白色微粘性土は平野東部、久米地区及びその周辺で堆積が見られる粘土と似ており、近年まで瓦製造用に粘土が採集されていた。［衣山窯跡周辺から良質の瓦粘土が採れる］との記述（愛媛県史　資料編　考古）もあることから、調査地周辺にはこの粘土の堆積が考えられる。今後、周辺での調査により粘土採掘抗などの検出が期待される。

２．遺　構

平安時代末から中世初頭の掘立柱建物址（掘立１）は、建物を構成する柱穴の切り合いにより建て替えが行なわれていた。建物の方向は東西軸方向で、やや南に偏っていた。この偏りは現代の地割にも見られるもので、地形に沿った偏りと思われる。柱列は東側では検出されなかったが、西方向へ延長される可能性を有している。柱穴からは詰石、根詰石に転用された瓦が出土した。器種は軒平瓦、平瓦、丸瓦である。

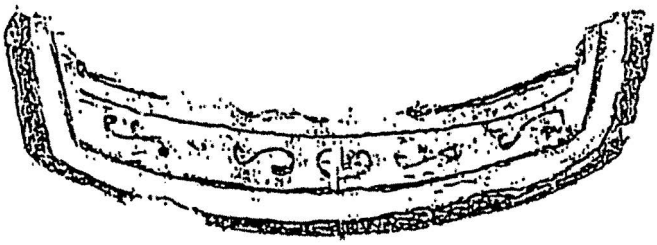
中世末から近世の溝（SD1）は、溝の南肩を現代の撹乱溝により欠如していて全体は不明である。出土した遺物は土師質土器の皿と土瓶で、皿は口縁の法量により３種類に分別できる。この偏った遺物の出土状況と溝の方位が現代の地割の軸線に似ていることから、溝の性格は地鎮に使用したものと考えられる。

３．遺　物

今回の調査で注目される遺物に、掘立柱建物址の柱穴から出土した軒平瓦（第11図１、２）が挙げられる。１の軒平瓦は外区の一部しか残っていなかったが、観察の結果、凹面には叩き台のアタリが確認され成形台を用いての一枚作りである。凸面の成形は僅かに布目が残っていることから、ナデ調整により布目は擦り消され、その後、縦方向約２分の１まで細縄叩き痕が残っている。瓦当文様は、外区外縁に珠文が付く重郭文と考えている。瓦当文様は異なるが、瓦当面の形状は衣山瓦窯出土の拓影（第16図）に似ている。製作年代は、製作技法などから奈良時代と考えられる。２は三重弧文の軒平瓦の破片である。瓦当面重弧文の凹凸線は明瞭で､凸線部分はやや丸味をもつ。顎部は曲線顎で、凹面は布目痕が残るが、凸面は丁寧にナデ調整されている。製作年代は、瓦当面凹凸線部の成形、顎の取り付け方、胎土が緻密などから白鳳期と考えられる。衣山窯跡は大正時代に調査が行われ、窯内や周辺からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦などが出土している。瓦当面の文様形態から、奈良時代後半から平安時代の中期すぎまで存続していたと推定されている。今回の調査地は、以前に調査された衣山窯

跡に非常に近い位置であり、出土した瓦もこの窯もしくは近接する窯で焼成された可能性もあるが、出土した三重弧文軒平瓦が白鳳期であるならば、窯跡の造営年代は少し遡る事になる。再度、周辺の調査により窯跡が検出され資料が増加することにより窯跡の創業時期、供給先などが判明する事を期待したい。

今回の調査では、平安時代末から近世初頭の遺構を検出する事ができた。周囲の調査では同時代の遺物は出土していたが、明確な遺構は未検出であった。検出数は少ないが同時代の遺構が検出されたことで、集落の一部が確認され調査の成果となった。今後、この地域の発掘調査が進むことで、より集落の範囲、構造が解明されることを期待する。



『愛媛県史　資料編　考古』より転載

第 16 図　衣山窯跡出土軒平瓦拓影

【参考文献】
『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県・愛媛県史編さん委員会　　1986
西尾　幸則　　1993　『来住廃寺遺跡　第 15 次調査報告書』松山市文化財調査報告書　第 34 集
西尾　幸則　他　　1994　『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書　第 44 集
宮内　慎一　　1996　『来住廃寺－第 19 次調査－』松山市文化財調査報告書　第 56 集
山之内　志郎　他　2016　『衣山北組遺跡・谷町遺跡 2 次調査』松山市文化財調査報告書　第 183 集
水本　完児　他　　2016　『衣山西ノ岡古墳・衣山大塚北遺跡』松山市文化財調査報告書　第 185 集
西村　直人　　2019　『松山城三之丸跡－ 13 次・15 次調査－』松山市文化財調査報告書　第 197 集

遺構一覧・遺物観察表　－ 凡例 －

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（1）遺構一覧表

地　区　欄　　グリッド名を記載。

規　模　欄　　（　）：現存検出長を示す。

出土遺物欄　　出土遺物の略記について

弥→弥生土器、土→土師器、須→須恵器、石→石製品

（2）遺物観察表

法　量　欄　　（　）：復元推定値

調　整　欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）㊡→底部

胎　土　欄　　胎土欄は混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→ 「1 ～ 4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼　成　欄　　焼成欄の略記について

◎→ 良好

表３　掘立柱建物一覧

掘　立	地　区	規　模（間）	方　位	桁行長（m）	梁行長（m）	出土遺物	時　期
1（旧）	B1 ～ C3	2 ×一	東西	4.75	―	弥・土・須・瓦	平安末～中世初頭
1（新）	B1 ～ C3	2 ×一	東西	4.75	―	弥・土・須・瓦	平安末～中世初頭

表４　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期
1	B2 ～ C4	皿状？	（4.96）×（1.20）×（0.10）	黄橙色微粘性土	土	中世末～近世

表５　柱穴一覧

番号（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
1	B1・C1	楕円形	0.50 × 0.45 × 0.37	黒褐色土　他	弥・土・須・瓦	掘立１（新）
2	C2	（楕円形）	0.40 ×（0.25）× 0.27	黒褐色土　他	弥・須・瓦	掘立１（旧）
3	C2・3	円形	0.50 × 0.45 × 0.26	黒褐色土　他	弥・土・瓦	掘立１（新）・（旧）
4	C1	（楕円形）	（0.50）× 0.50 × 0.30	黄色砂質土　他	瓦	掘立１（旧）
5	C2	楕円形	0.50 × 0.42 × 0.35	黒褐色土　他	弥・瓦	掘立１（新）

表６　掘立１出土遺物観察表　（瓦）

番号	種類	文様	法量			調整		布目（経糸） 本数（緯糸）	色調（凸面） （凹面）	胎土	焼成	図版
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	凸面	凹面					
1	軒平	重郭？	(24.2)	(20.0)	2.2	布目擦り消し 細縄叩き	布目痕	5本 5本	灰色 灰色	密	やや軟	7
2	軒平	三重弧	(9.8)	(10.7)	4.7	ハケ→ナデ	布目痕	9本 8本	灰白色 黄灰色	密	やや軟	7
3	平	—	(11.5)	(13.6)	2.1	細縄叩き ハナシ砂	布目痕	7本 7本	褐灰色 灰白色	やや密	硬質	8
4	平	—	(7.8)	(6.4)	2.7	細縄叩き	布目痕	8本 8本	灰黄色 灰白色	密	やや軟	8
5	平	—	(6.1)	(6.8)	1.9	細縄叩き	布目痕	8本 8本	灰色 灰白色	石・長 (1～3)	やや軟	8
6	丸	—	(14.8)	(9.1)	1.5	ハケ→ナデ	布目痕	6本 6本	灰色 灰色	密	やや軟	8

表７　SD1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	皿	口径　(11.6) 底径　(9.0) 器高　1.5	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	橙色 橙色	石・長（1） 金 ◎		9
8	皿	口径　(11.5) 底径　(8.6) 器高　1.6	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 金 ◎		
9	皿	口径　11.5 底径　8.8 器高　1.5	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 金 ◎		9
10	皿	口径　(11.0) 底径　(7.5) 器高　1.9	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	明黄橙色 にぶい黄橙色	微砂粒 金 ◎		
11	皿	口径　(9.1) 底径　(7.1) 器高　1.1	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	橙色 橙色	石・長（1） 金 ◎		9
12	皿	口径　(9.0) 底径　(6.4) 器高　1.4	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	橙色 橙色	密 金 ◎		
13	皿	口径　(9.0) 底径　(6.6) 器高　1.2	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 金 ◎		
14	皿	口径　(7.0) 底径　(5.5) 器高　1.1	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） 金 ◎		9
15	皿	口径　(7.0) 底径　(5.5) 器高　1.1	外傾する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） 金 ◎		
16	土瓶	長さ　(7.2) 外径　3.5 厚さ　0.8	紐巻き上げによる成型。	指押圧→ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 金		9

表８　撹乱出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
17	硯	約 1/3	赤色粘板岩	(7.6)	(5.2)	1.7	(91.6)	赤間石か	9

表９　撹乱出土遺物観察表　（金属製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				径（cm）	孔（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
18	銭	完形	銅	2.40	0.55	0.11	3.0	寛永通宝	9

第４章　久万山本遺跡

第１節　調査の経緯

発掘調査は、2017（平成 29）年 5 月 26 日（金）から開始した。調査は 2 つの調査区（1・2 区）を設定した後、重機を使用して表土の掘削をし、作業員による遺構検出や掘削、測量作業を行った。作業終了後は重機を使用して埋め戻しを行い、同年 6 月 9 日（金）にて屋外調査を終了した。

調査終了後は 2017（平成 29）年 7 月 31 日（月）までの間に出土品や図面、写真類の整理作業を行い、令和 3 年度には報告書作成のための本格的な整理作業（遺物復元・実測等）を開始した。翌年度には報告書刊行に伴う編集作業を行った。以下、平成 29 年度に実施した調査・整理作業工程を略記する。

第 17 図　調査地測量図

【発掘調査：平成 29 年度】

5 月 26 日（金）：調査で必要な簡易トイレやテント、水中ポンプ等の発掘機材や発掘用具を搬入する。併行して、申請図面に基づき、調査区を設定する。

5 月 29 日（月）：調査地内にガードフェンスを設置し、安全対策を図る。その後、重機（バックホー 0.1㎥・不整地運搬車 3t）を搬入し、表土掘削作業に取り掛かる（本日で終了）。

5 月 30 日（火）：遺構検出作業終了後、高所作業車を用いて検出状況写真を撮影する。検出した遺構は竪穴建物 1 棟、溝 1 条、土坑 6 基、柱穴 14 基である。2 区検出の竪穴建物から調査を開始し、建物の掘り下げ中に焼土や炭化材を検出する。

5 月 31 日（水）：竪穴建物の精査をし、検出状況写真を撮影する。測量後、炭化材を取り上げ、埋土の掘り下げを続行する。併行して、土坑や柱穴の半截作業及び測量を行う。なお、本日、株式会社エクセル調査設計により、調査地内に 4 級基準点が打設される。

6 月 1 日（木）：土坑の掘削を終了し、写真撮影と測量を行う（本日にて終了）。その後、1 区の遺構平面図を作成する。

6 月 2 日（金）：竪穴建物の掘り下げ、及び調査区壁面の土層図作成を行う。

6 月 5 日（月）：竪穴建物の掘り下げを終了し、出土した遺物の写真撮影や取り上げを行う。併行して、2 区の遺構平面図を作成する。

6 月 6 日（火）：愛媛大学名誉教授 下條信行先生を招聘し、発掘現場にて調査指導を乞う。

6 月 8 日（木）：調査区の精査をし、遺構完掘状況の写真撮影及び測量作業を行う。

6 月 9 日（金）：重機を使用して埋め戻し作業を行い、作業終了後、発掘機材や発掘用具を搬出し、屋外調査を終了する。

6 月 12 日（月）：埋蔵文化財センターにて出土品の洗浄・注記作業、及び図面や写真の整理作業を開始し、7 月 31 日（月）にて終了する。

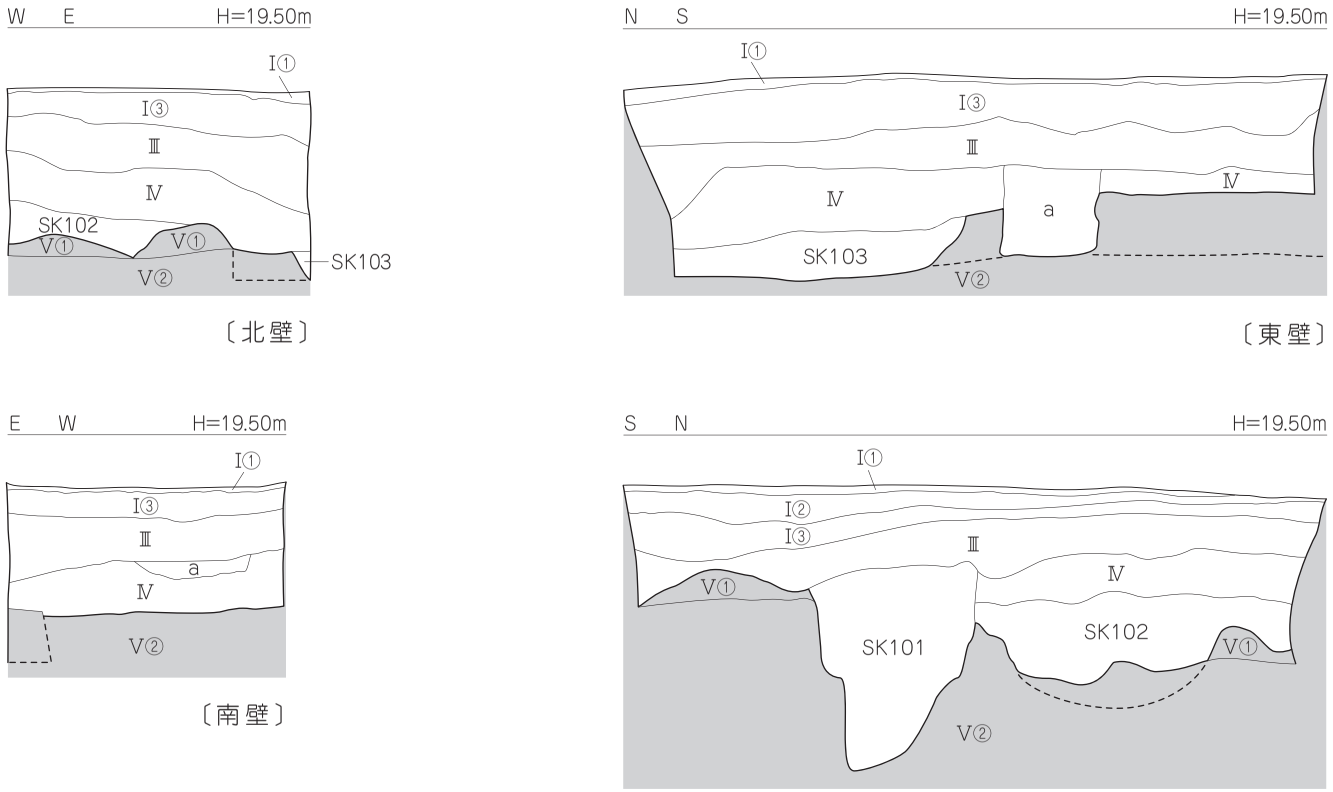
調 査 名：久万山本遺跡
調査場所：松山市久万ノ台 1035 番の一部
調査面積：約 24㎡
調査期間：2017（平成 29）年 5 月 26 日（金）～ 同年 6 月 9 日（金）
調査担当：公益財団法人松山市・文化スポーツ振興財団埋蔵文化財センター　主任　水本　完児

第 2 節　層　位（第 18 ～ 20 図、図版 11）

調査地は松山平野西部、低位丘陵上の標高 18.8 ～ 19.0 mに立地する。調査以前は、宅地であった。調査地の基本層位は、以下の 5 層（第Ⅰ～Ⅴ層）である。このうち、第Ⅲ層と第Ⅳ層は遺物包含層であり、第Ⅴ層上面が調査における最終遺構検出面である。

第Ⅰ層－近現代の造成土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

第Ⅰ①層：造成に伴う真砂土で、1 区全域と 2 区北半部を除く地域にみられ、層厚は 2 ～ 14cmである。

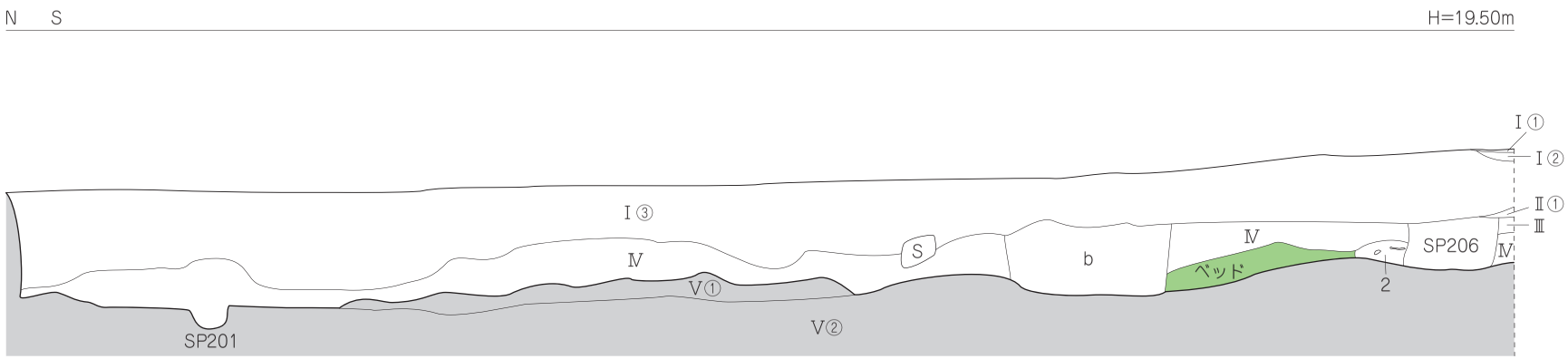


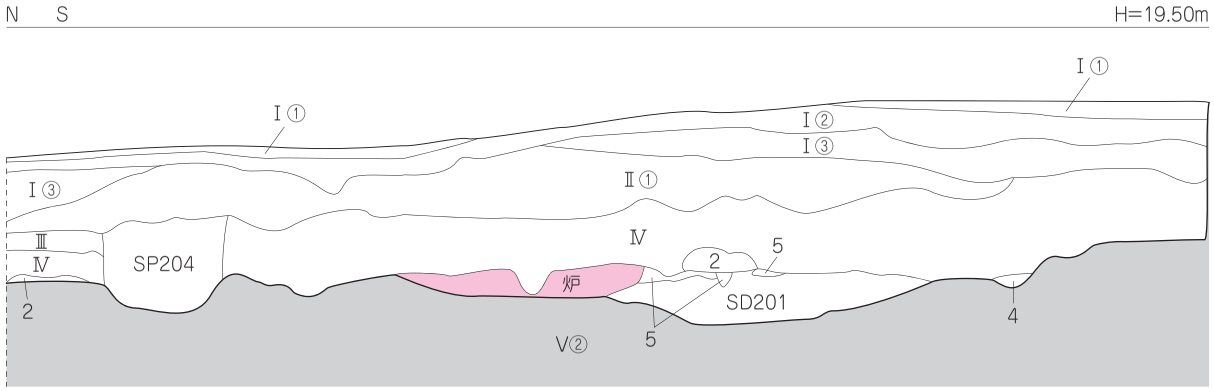
Ⅰ① 真砂土
Ⅰ② 褐灰色土（7.5YR 6/1）
Ⅰ③ 灰黄褐色土（10YR 4/2）
Ⅲ 黒褐色土（10YR 3/2）
Ⅳ 黒褐色土（7.5YR 3/1）
Ⅴ① 黄褐色土（2.5Y 5/3）
Ⅴ② 明褐色土（7.5YR 5/6）

a 黒褐色土（7.5YR 3/1）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入

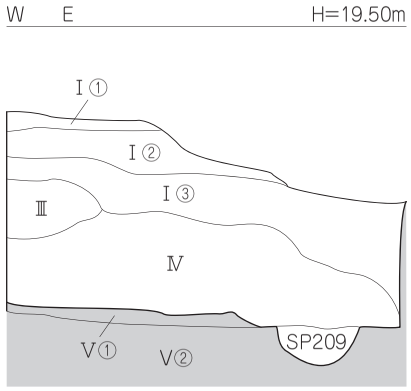
0 2m
（S=1:30）

第18図 1区土層図





〔東壁〕



〔北壁〕

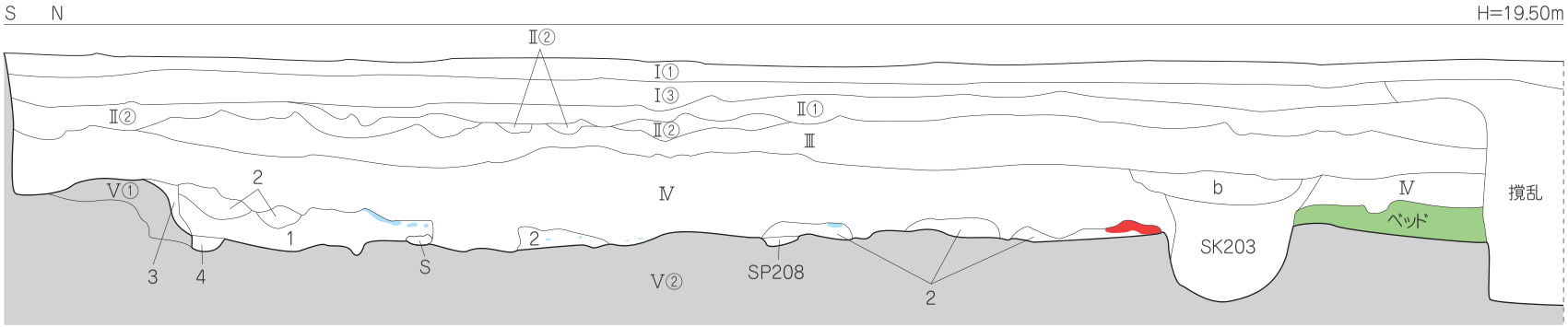
Ⅰ① 真砂土
Ⅰ② 褐灰色土（7.5YR 6/1）
Ⅰ③ 灰黄褐色土（10YR 4/2）
Ⅱ① にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/4）
Ⅲ 黒褐色土（10YR 3/2）
Ⅳ 黒褐色土（7.5YR 3/1）
Ⅴ① 黄褐色土（2.5Y 5/3）
Ⅴ② 明褐色土（7.5YR 5/6）

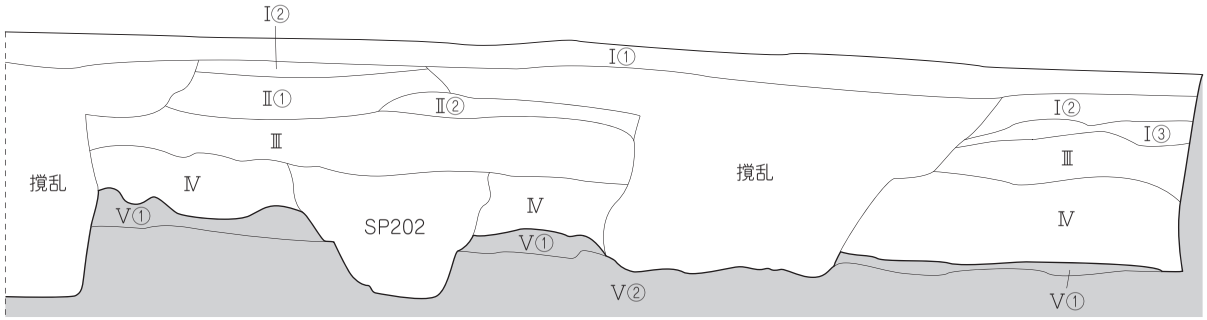
b 黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入

2 黒褐色土（7.5YR 3/2）炭混入
4 黒褐色土（7.5YR 3/1）〔周壁溝〕
5 黄褐色土（2.5Y 5/3）
〔SB201〕

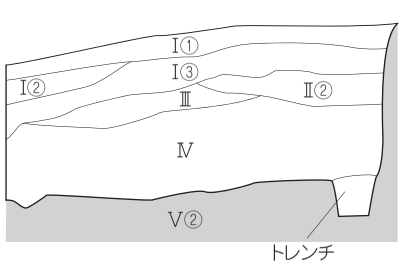
0 2m
（S=1:30）

第19図　2区東壁・北壁土層図





〔西壁〕



〔南壁〕

Ⅰ① 真砂土
Ⅰ② 褐灰色土（7.5YR 6/1）
Ⅰ③ 灰黄褐色土（10YR 4/2）
Ⅱ① にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/4）
Ⅱ② にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/4）
Ⅲ 黒褐色土（10YR 3/2）
Ⅳ 黒褐色土（7.5YR 3/1）
Ⅴ① 黄褐色土（2.5Y 5/3）
Ⅴ② 明褐色土（7.5YR 5/6）

b 黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入
焼土
炭
1 黒褐色土（7.5YR 3/2）炭混入
2 黒褐色土（7.5YR 3/2）炭・焼土混入
3 黒褐色土（10YR 3/2）
4 黒褐色土（7.5YR 3/1）〔周壁溝〕
〔SB201〕

0 2m
（S=1:30）

第 20 図　2 区西壁・南壁土層図

第Ⅰ②層：褐灰色土（7.5YR 6/1）で１区西半部と２区南西部を除く地域にみられ、層厚は２～18cmである。

第Ⅰ③層：灰黄褐色土（10YR 4/2）で１区と２区の全域にみられ、層厚は３～42cmである。

第Ⅱ層－近現代の農耕に伴う耕土で、土色の違いにより２種類に分層される。

第Ⅱ①層：にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/4）で２区にみられ、層厚は２～30cmである。

第Ⅱ②層：にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/4）で２区にみられ、層厚は２～14cmである。

第Ⅲ層－黒褐色土（10YR 3/2）で１区と２区の全域にみられ、層厚は２～30cmである。第Ⅲ層は、南西から北東に向けて緩やかな傾斜堆積をなす。調査区壁面の土層観察により、本層上面から掘削された遺構（柱穴）を確認している。本層中からは、土師器片や須恵器片が少量出土している。

第Ⅳ層－黒褐色土(7.5YR 3/1)で１区と２区の全域にみられ、層厚は４～42cmである。第Ⅲ層と同様、第Ⅳ層は南西から北東へ向けて緩やかな傾斜堆積をなす。本層上面、及び本層中から掘削された遺構（竪穴建物・土坑・柱穴）を確認している。なお、平面調査では検出されていないが、土層観察の結果、本層上面から掘削された遺構〔埋土ａ：黒褐色土（7.5YR 3/1）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入、埋土ｂ：黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土(7.5YR 5/6)がブロック状に混入〕を確認している。本層中からは、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器のほかに石器（石鏃）が出土している。

第Ⅴ層－本層上面は、調査における最終の遺構検出面である。土色の違いにより、２種類に分層される。本層上面は１区南西部が最も高く、暫時、２区北東部に向けて緩やかな傾斜をなす。１区南西部の標高は約 19.0 m、２区北東部では標高約 18.4 mである。

第Ⅴ①層：黄褐色土（2.5Y 5/3）で１区北半部と２区で部分的にみられ、層厚は２～26cmである。

第Ⅴ②層：明褐色土（7.5YR 5/6）で１区と２区のほぼ全域にみられる。

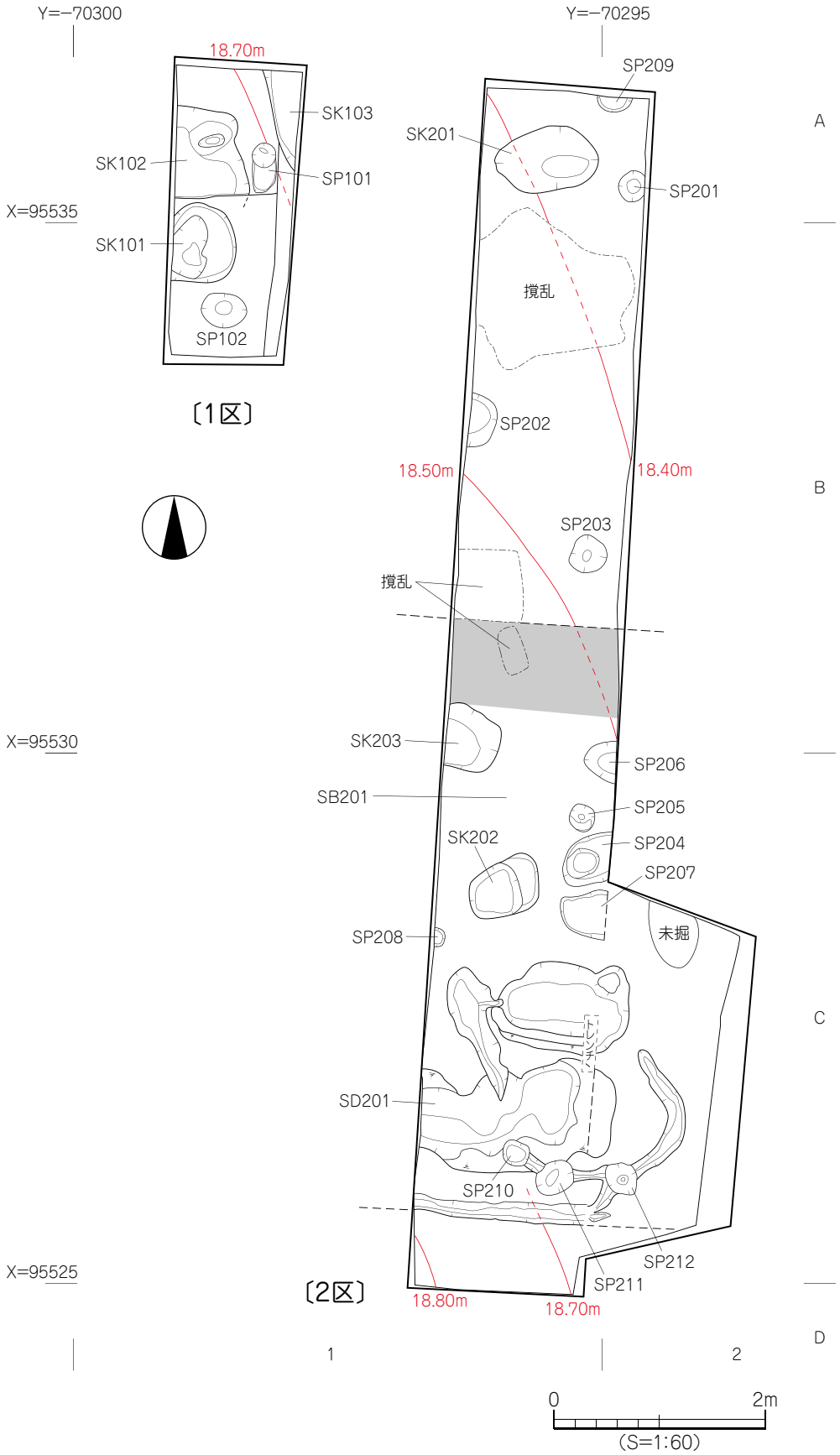
検出した遺構や出土遺物から第Ⅲ層は古墳時代、第Ⅳ層は弥生時代までに堆積した土層と考えられる。調査にあたり、調査地内に５m四方のグリッドを設定した。グリッドは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、西から東へ１・２とし、A1・A2‥‥D2 区といったグリッド名を付した（第 21 図）。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

なお、本調査では検出した遺構は略号で表記し、遺構番号は３桁として百の位には区名を付けた。また、遺物は地区に関係なく、通し番号とした（1 ～ 76）。

（例：２区の３号土坑 → SK203）

第３節　遺構と遺物

調査では竪穴建物１棟、溝１条、土坑６基、柱穴 14 基を検出した（第 21 図、図版 11）。内訳は１区が土坑３基、柱穴２基、２区が竪穴建物１棟、溝１条、土坑３基、柱穴 12 基である。すべて、第Ⅴ層黄褐色土または明褐色土上面での検出である。遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、石器、木器が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（600 × 440 × 140㎜）２箱分である。


Y=−70300
Y=−70295
18.70m
SK103
SK102
SP101
X=95535
SK101
SP102
〔1区〕
SP209
SK201
SP201
A
撹乱
SP202
18.50m
18.40m
B
SP203
撹乱
X=95530
SK203
SP206
SB201
SP205
SK202
SP204
SP207
SP208
未掘
C
トレンチ
SD201
SP210
SP212
X=95525
〔2区〕
SP211
18.80m
18.70m
D
1
2
0
2m
(S=1:60)

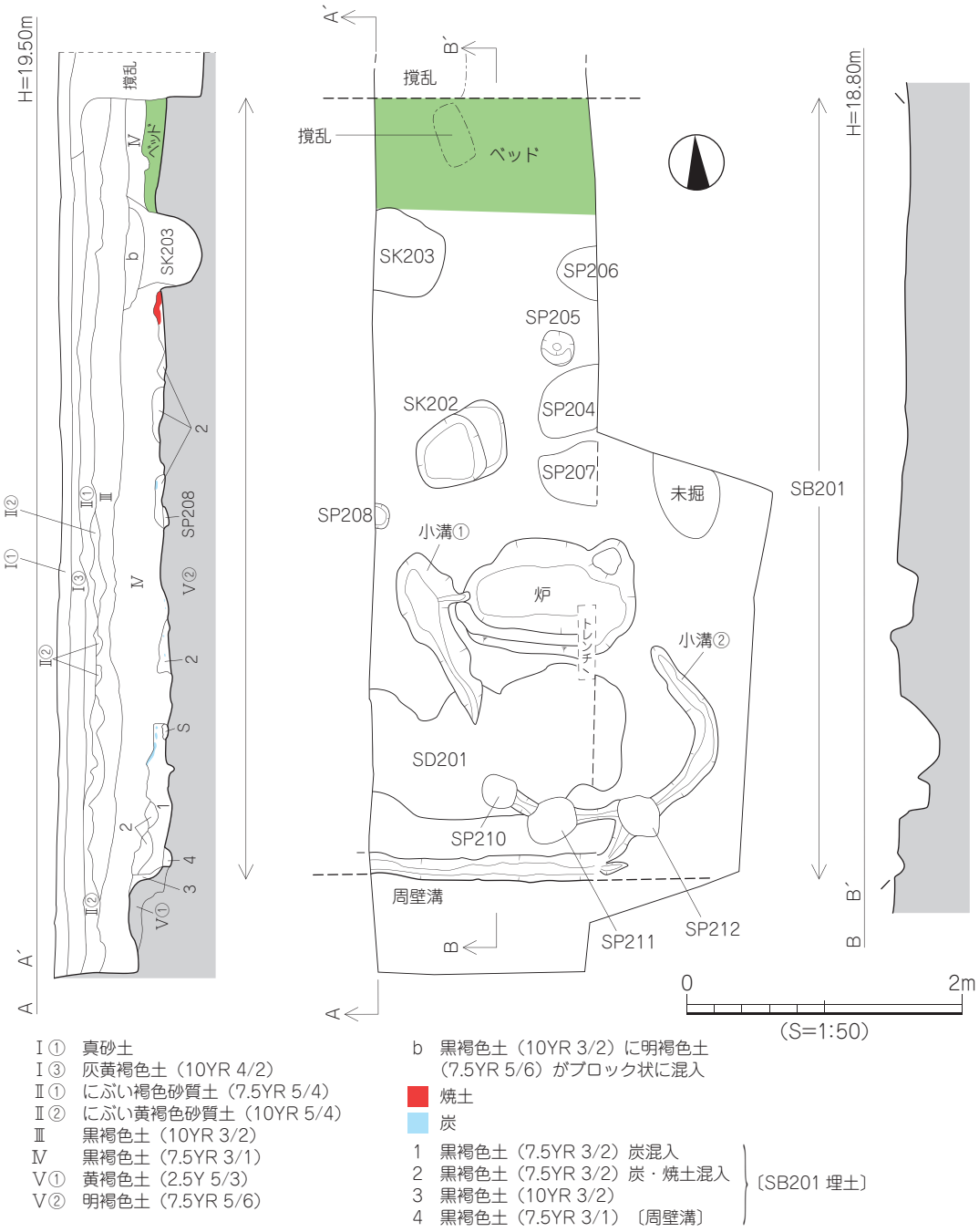
第 21 図　遺構配置図

1．竪穴建物

SB201（第 22 ～ 24 図、図版 14 ～ 16）

2 区南側、B1 ～ C2 区で検出した竪穴建物で、検出時には炭化材や炭化物、焼土塊が散在しており、焼失建物であることが判明している。調査期間の都合上、重機により第Ⅴ層上面まで掘削を行ったことから、建物埋土の大半を削平することになった。

SB201 の壁体は重機による掘削のため大半は消失しており、埋土の一部と周壁溝や屋内高床部（ベッドと呼称。）の一部及び炉址のみを検出した。まず、周壁溝は建物南側にて検出されたが、北側は削

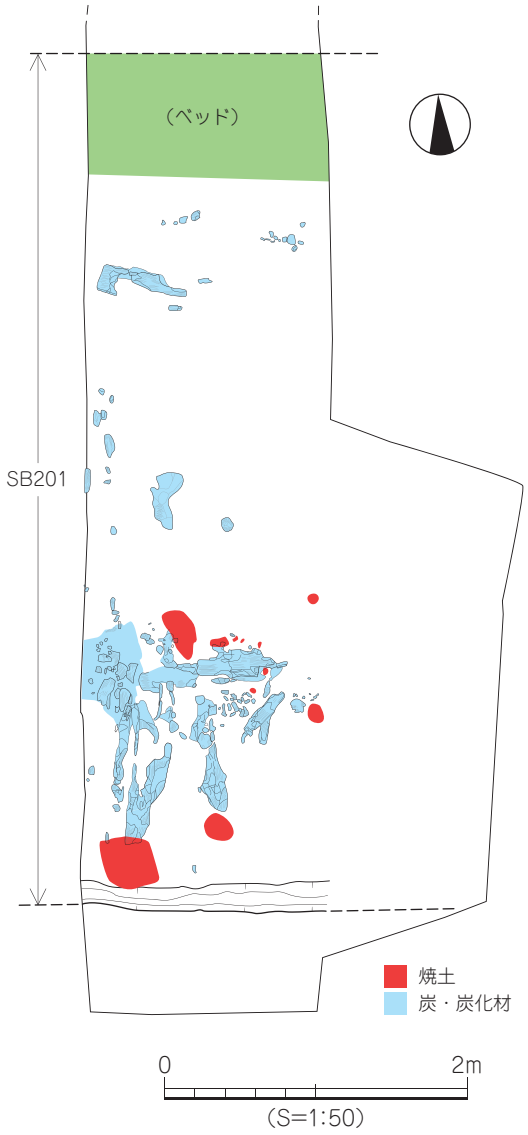


第 22 図　SB201 測量図

平が著しく未検出である。その一方で、建物北側には調査壁の土層観察によりベッドが存在しており、建物北壁はベッドの遺存状況により推定範囲を提示している。

建物の平面形態は方形または隅丸方形と思われ、規模は南北検出長 5.70 m、東西検出長 2.80 mである。土層観察の結果、壁高は約 25 cmを確認した。建物埋土は、黒褐色土（7.5YR 3/2）や黒褐色土（7.5YR 3/2）に黄褐色土（2.5Y 5/3）が混入するものである。前述のとおり、建物埋土は大半が削平され、検出時は建物床面が露呈している状況であったが、建物南側を中心に中央部や北側には炭化材や焼土が検出された。

内部施設は、ベッドと周壁溝及び炉址を検出した。ベッドは建物北壁沿いにあり、黒褐色土（7.5YR 3/1）と明褐色土（7.5YR 5/6）の混合土を用いて構築され、その規模は幅 60 cm以上、高さは 8 ～ 14cmである。なお、ベッドの両端は撹乱や土坑 SK203 により削平されており、正確な規模は不明である。次に、周壁溝は建物南側で検出した。直線的に掘削されており、規模は幅 12 ～ 20cm、深さ 6 ～ 11 cmである。埋土は、黒褐色土（7.5YR 3/1）単層である。



第 23 図　SB201 炭化材・焼土検出状況図

炉址は建物中央部南寄りで検出され、長径 1.20 m、短径 0.85 m、深さ 30cmを測る楕円形状の掘り込みと、掘り込みを取り囲むような溝で構成されている。掘り込みの断面形態は逆台形状をなし、埋土は建物埋土と同様の黒褐色土（7.5YR 3/2）である。なお、埋土中位には焼土が厚さ 10cm程度堆積している。また、掘り込み南側部分には幅 10cm、高さ 15cm程度の炉提が一部遺存している。炉堤は、黄褐色土（2.5Y 5/3）を用いて構築されている。掘り込みの西側～南東部では、溝を検出した。とりわけ、西側の溝は掘り込みと連結しており、掘り込みと溝とは一連の遺構と判断される。溝埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）であるが、埋土中からは少量の灰が検出されている。

このほか、建物床面からは 2 基の土坑（SK202・203）と大小 8 基の柱穴（SP204 ～ 208・210 ～ 212）を検出した。このうち、SK202 と 3 基の柱穴（SP205・207・208）を除く遺構は土層観察の結果や建物との重複より、SB201 構築以降に掘削されたものである。なお、主柱穴は判断できなかった。

遺物は、埋土中や炉址内より弥生土器片が少量出土した。炭化材や炭化物、焼土は建物南西部に比較的集中して分布しており、焼土は炭化材の上面にて検出されている。また、炭化材には柱材と思わ

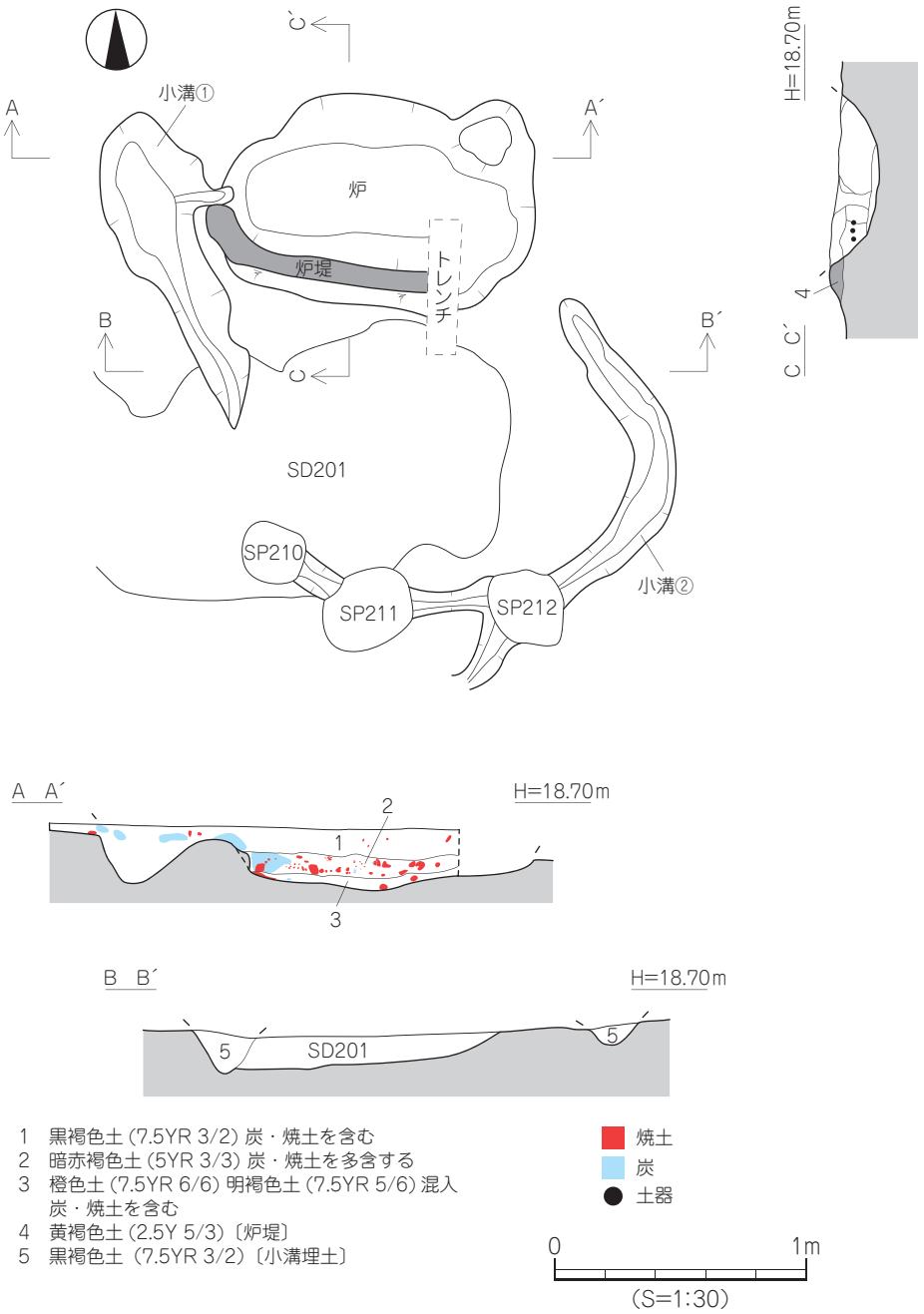
れる木材が含まれていたが、その方向には規則性が認められなかった。このことから、SB201 は廃絶時に建物を解体した後、屋根材や柱材を焼却したものと推測される。

出土遺物（第 25・26 図、図版 20）

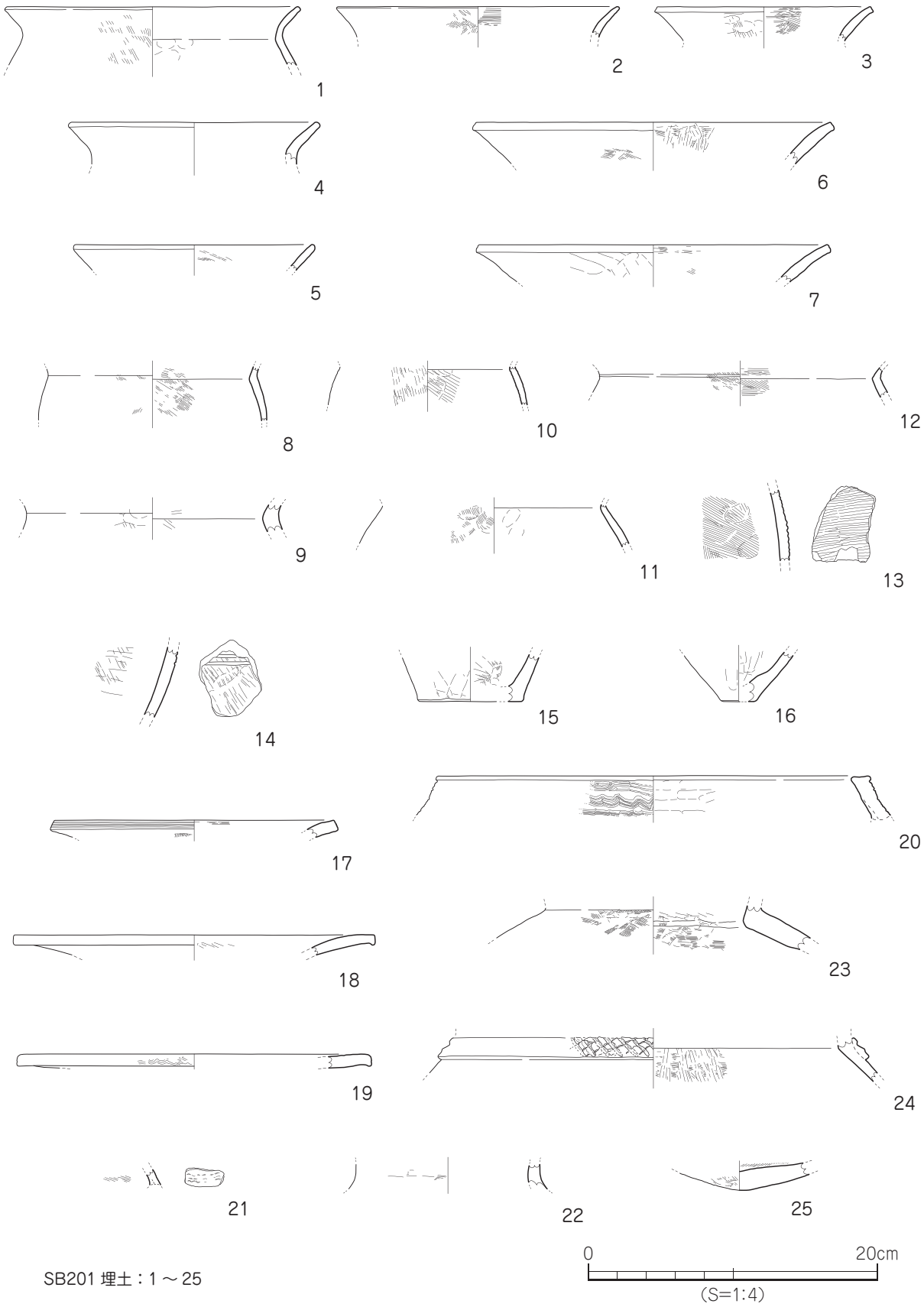
1 ～ 35 は SB201 埋土出土品、36・37 は炉址内出土品である。

〔SB201 埋土出土品〕

1 ～ 16 は甕形土器。1 は「く」の字状口縁で、弥生時代後期の特徴を示す。6・7 は口径 24cm以上の大型品で、6 の内面にはヘラミガキを施す。8 ～ 12 は口縁～胴部片である。10 の外面にはハケメ



第 24 図　SB201 内炉址測量図



SB201 埋土：1 ～ 25

第 25 図　SB201 出土遺物実測図（1）

調整後、タタキ調整がみられる。13・14 は胴部片。13 の外面にはタタキ調整がみられ、14 の外面にはヘラ状工具による沈線文 2 条以上が施される。15・16 は底部片で、平底である。

17 ～ 25 は壺形土器。17 ～ 19 は広口壺の口縁部片で、17 の口縁端部には沈線文 3 条を施し、19 には波状文を施す。20・21 は複合口縁壺。20 の口縁端部は内傾する面をもち、口縁部にはクシ状工具による波状文を施す。21 は小片で、波状文が僅かに残る。22 は頸部片、23・24 は肩部片である。24 は断面方形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を施す。

26 ～ 31 は鉢形土器で、26・27 の口縁部は直立する。28 は推定口径 41.2㎝を測る大型品で、口縁部は外反し、口縁端面はナデにより凹む。体部内面には、ヨコないしナナメ方向のヘラミガキ調整がみられる。29・30 は胴部片、31 は底部片で、突出する小さな平底である。

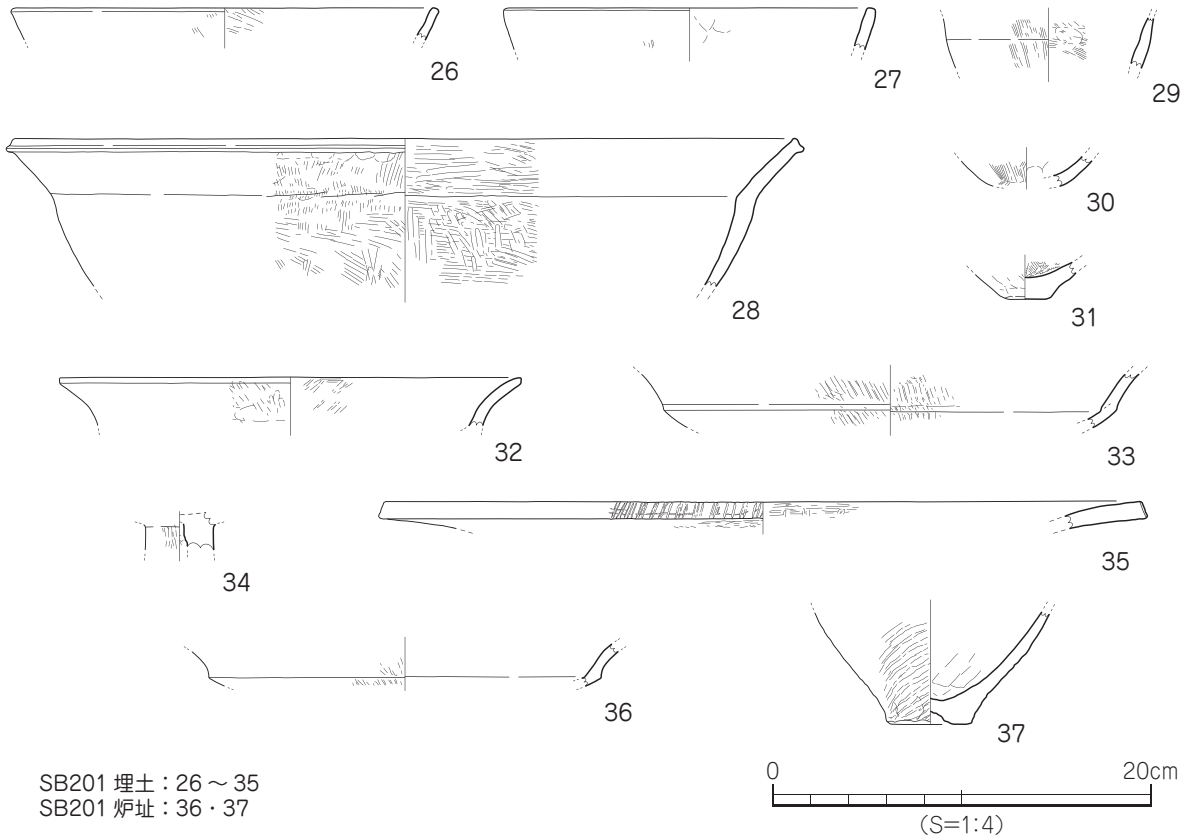
32 ～ 34 は高坏形土器。32 は口縁部が外反し、33 の坏部下位には稜をもつ。32・33 の内外面及び 34 の外面には、丁寧なヘラミガキを施す。35 は器台形土器。推定口径 39.8㎝を測る大型品で、口縁端部に刻目を施す。

〔SB201 炉址出土品〕

36 は高坏形土器。坏部片で、口縁部は外反する。37 は甕形土器の底部で、底部中央部は凹む。外面には、ナナメ方向のタタキ調整がみられる。

なお、出土品のうち、胎土中に赤色酸化土粒の含まれる遺物が 6 点（12・13・15・20・29・31）ある。

時期：出土した土器の形態や甕形土器に施されるタタキ調整等より、SB201 の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半から末とする。



第 26 図　SB201 出土遺物実測図（2）

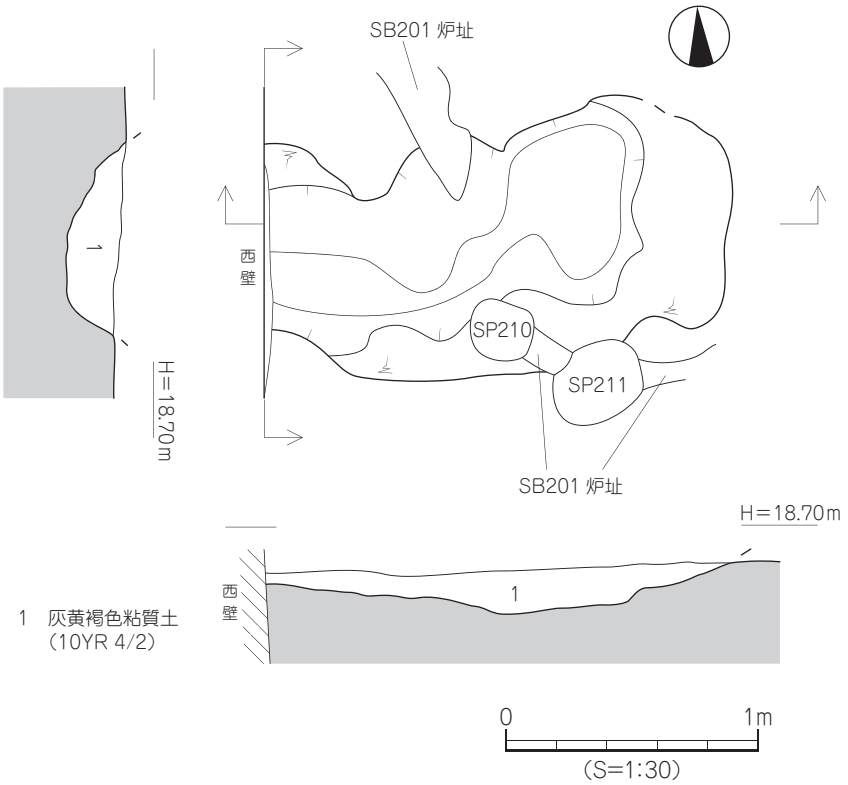
2．溝

調査では、2 区から溝状遺構 1 条を検出した。

SD201（第 27 図、図版 14）

2 区南側 C1・2 区に位置し、前述した竪穴建物 SB201 の底面にて検出した溝状遺構で、遺構西側は調査区外に続く。遺構上面は SB201 の炉址に伴う小溝や 2 基の柱穴（SP210・211）により一部、削平されている。規模は東西検出長 1.86 m、南北長 0.96 m、深さは 16cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は粘性の強い灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）単層である。遺構基底面には、やや凹凸がみられる。遺構内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB201 構築以前の遺構であることから、SD201 は概ね、弥生時代後期後半以前とする。



第 27 図　SD201 測量図

3．土　坑

調査では、6 基の土坑を検出した。内訳は 1 区が 3 基（SK101 ～ 103）、2 区は 3 基（SK201 ～ 203）である。なお、1 区北隅は発掘調査開始時に土層の堆積状況を確認するため、重機による深掘を行ったため、1 区北隅で検出した 2 基の土坑（SK102・103）は上部が削平されている。

SK101（第 28 図、図版 16）

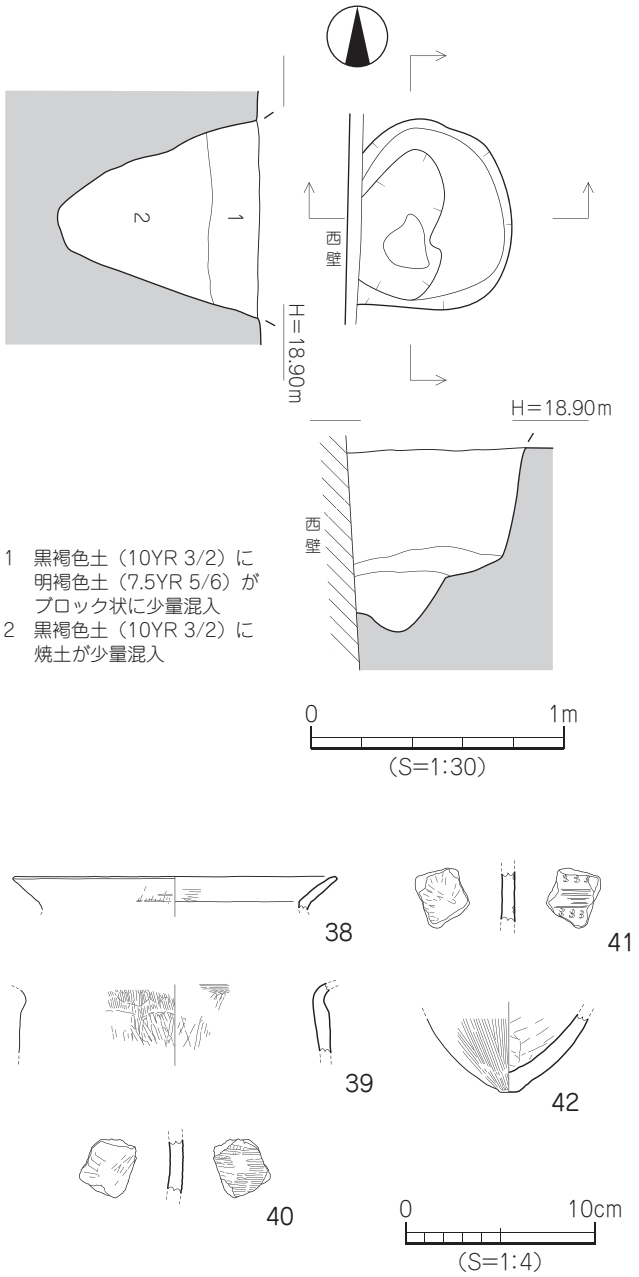
1 区北部、A・B1 区にて検出した土坑で、土坑西側は調査区外に続く。平面形態は円形をなすもの

と思われ、規模は南北長 0.75m、東西検出長 0.63m、深さは 72cm である。1 区西壁の土層観察により、本来は第Ⅳ層上面から掘削された遺構であり、第Ⅲ層が遺構上面を覆う。なお、第Ⅲ層下では深さ 80cm を測る。断面形態は、遺構中央部が凹む舟底状をなす。埋土は 2 層に分層され、上層は黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に少量混入、下層は黒褐色土（10YR 3/2）で、埋土中には少量の焼土が含まれる。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、少量の弥生土器片が出土した。

出土遺物（図版 21）

38 ～ 41 は甕形土器。いずれも小片で、38 の口縁部は「く」の字状をなす。39 は口縁～胴部片で、内面にはタテ方向のヘラミガキを施す。40・41 は胴部片で、40 の外面にはタタキ調整がみられる。41 の外面にはクシ状工具による沈線文と、沈線文の上下に 2 ケ 1 組の竹管文を施す。41 の内外面には、丁寧なヘラミガキがみられる（弥生時代前期後半）。42 は鉢形土器で、突出する小さな平底である。

時期：出土遺物の特徴より、SK101 は弥生時代後期後半から末とする。



第 28 図　SK101 測量図・出土遺物実測図

SK102（第 29 図、図版 17）

1 区北部、A1 区にて検出した土坑であるが、調査開始当初は、調査地に堆積する土層を確認するため、1 区北隅に重機による深掘りを実施したことにより、SK102 の上部は削平されている。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は南北検出長 0.86m、東西検出長 0.75 m、深さは 15cmである。なお、1 区西壁の土層観察により土坑上面は第Ⅳ層が覆い、第Ⅳ層下では深さ 32cmを測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）単層である。土坑基底面には凹凸がみられ、土坑北側には径 0.12 ～ 0.26 m、深さ 5cm程度のピット状の凹みがある（埋土は土坑と同じ）。遺物は埋土中より、少量の弥生土器片が出土した。

出土遺物

43 は壺形土器。複合口縁壺の口縁部片で、沈線文 2 条を施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土遺物の特徴や検出層位より、SK102 は弥生時代後期後半とする。

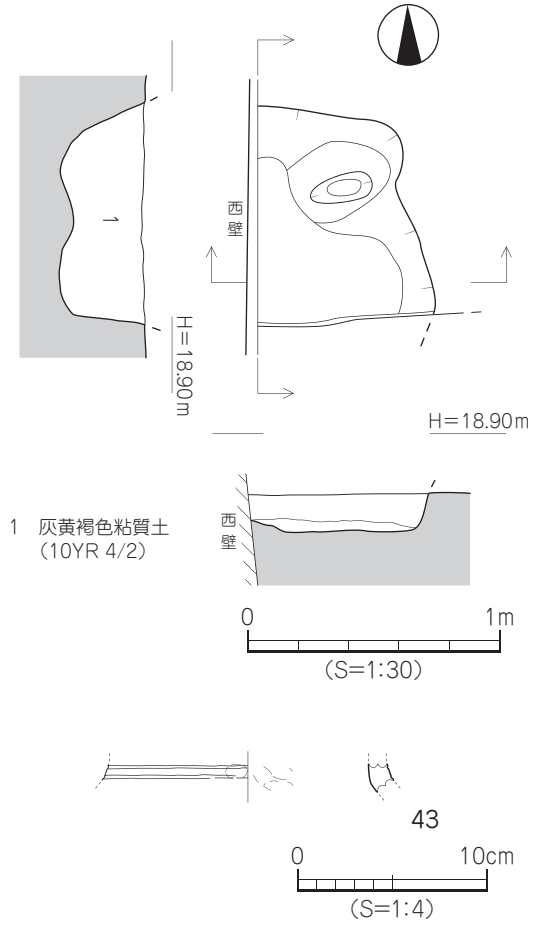
SK103（第 30 図、図版 17）

1 区北端、A1 区にて検出した土坑で、土坑北側と東側は調査区外に続く。SK102 と同様、重機による深掘りのため遺構上部は消失している。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 0.98 m、東西検出長 0.54 m、深さは 13㎝である。1 区東壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅳ層が覆い、第Ⅳ層下では深さ 28㎝を測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入するものである。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

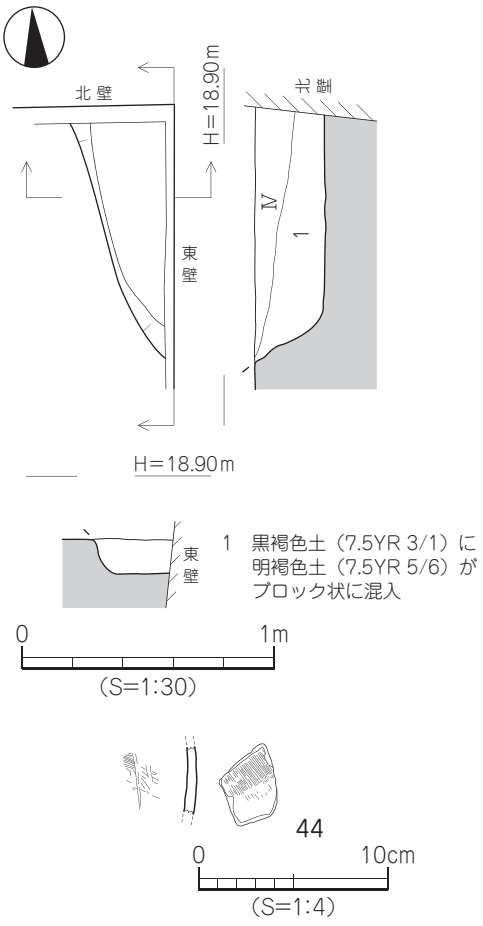
出土遺物

44 は甕形土器。胴部の小片で、外面はハケメ調整、内面にはハケメ調整後、ヘラミガキを施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土遺物の特徴と検出層位より、SK103 は弥生時代後期後半とする。



第 29 図　SK102 測量図・出土遺物実測図

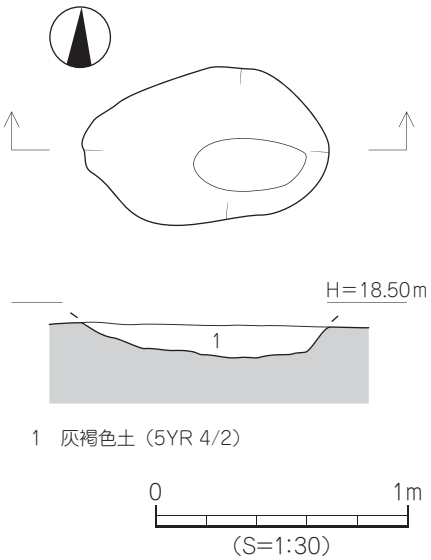


第 30 図　SK103 測量図・出土遺物実測図

SK201（第 31 図、図版 18）

2 区北部、A1 区にて検出した土坑である。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 0.97 m、短径 0.60m、深さは 13㎝である。断面形態は緩やかな逆台形状をなし、埋土は灰褐色土（5YR 4/2）単層である。土坑基底面は、中央部がやや凹む。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であり、時期は不明とする。



第 31 図　SK201 測量図

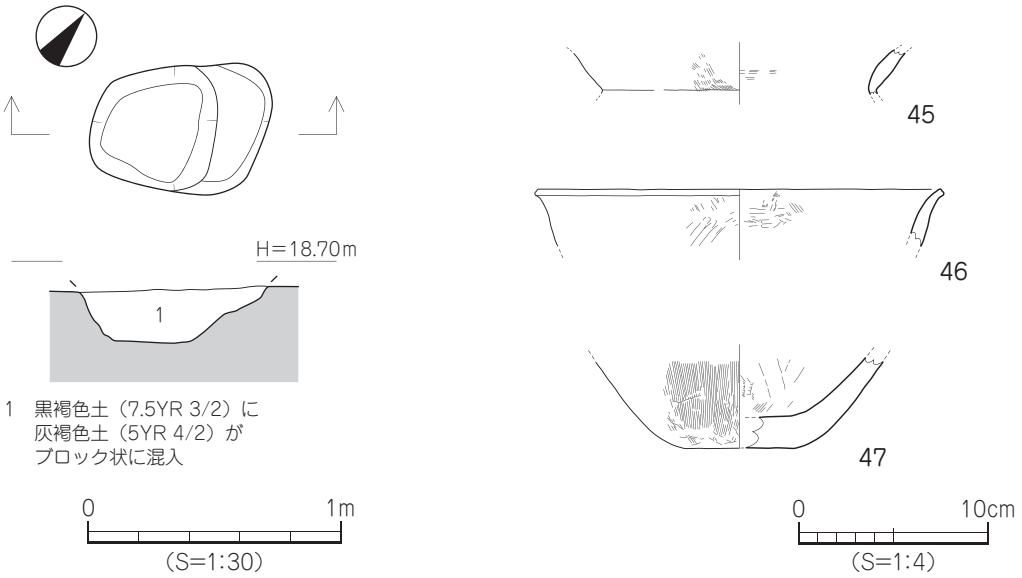
SK202（第 32 図、図版 18）

2 区中央部南寄り、C1 区に位置する土坑で、SB201 底面にて検出した。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 0.76m、短径 0.54 m、深さは 20㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）に灰褐色土（5YR 4/2）がブロック状に混入する。土坑基底面には凹凸がなく、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（図版 21）

45 は甕形土器。「く」の字状をなす口縁部片で、外面にはハケメ調整がみられる。46 は鉢形土器。口縁部は短く外反し、体部外面にはナナメ方向のヘラミガキがみられる。47 は壺形土器の底部。平底で、内外面にはハケメ調整がみられる。

時期：出土遺物の特徴より、SK202 は弥生時代後期後半とする。このことから、SK202 は SB201 に付随する土坑の可能性がある。



第 32 図　SK202 測量図・出土遺物実測図

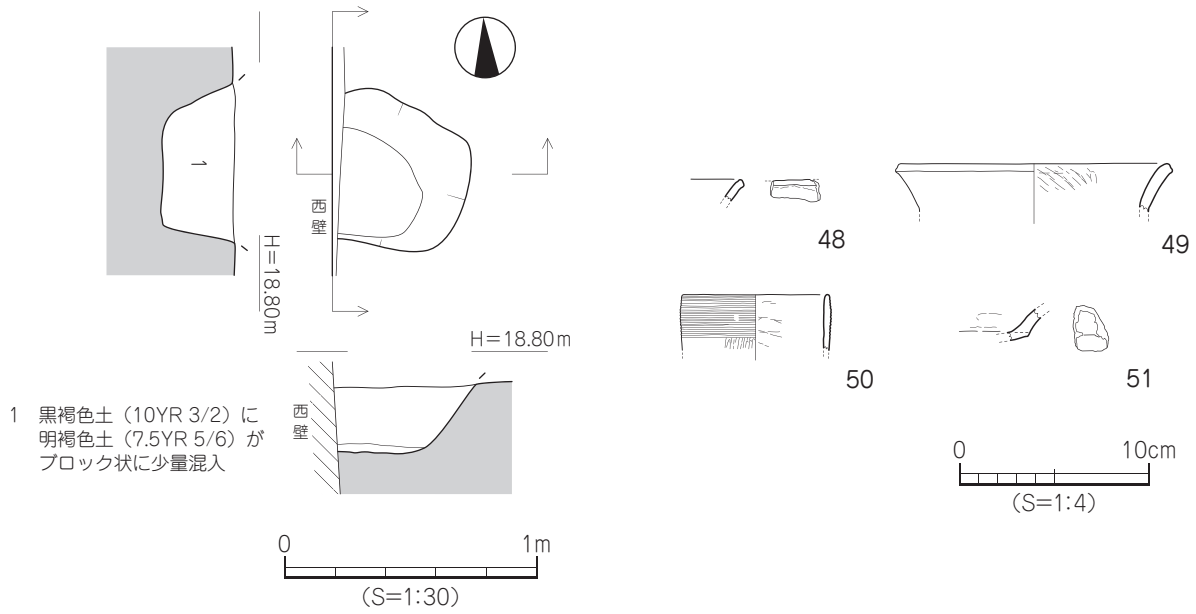
SK203（第 33 図、図版 19）

2 区中央部、B・C1 区にて検出した土坑で、土坑西側は調査区外に続く。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 0.66 m、南北長 0.58 m、深さは 26cmである。2 区西壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘削された遺構であり、第Ⅳ層下では深さ 56cmを測る。また、SK203 は SB201 埋没以降に掘削された遺構である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に少量混入する。土坑基底面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、少量の弥生土器片が出土した。

出土遺物（図版 21）

48 は甕形土器の小片で、口縁端部は「コ」字状をなす。49・50 は壺形土器。49 は太頸壺で、口縁部は短く外反し、内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。50 は細長頸壺で、外面にはクシ状工具による細沈線文 20 条を施す。外面には、横方向の丁寧なヘラミガキ調整がみられる。51 は高坏形土器の坏部小片で、口縁部は外反する。

時期：出土遺物の特徴と SB201 との重複関係より、SK203 は弥生時代末とする。



第 33 図　SK203 測量図・出土遺物実測図

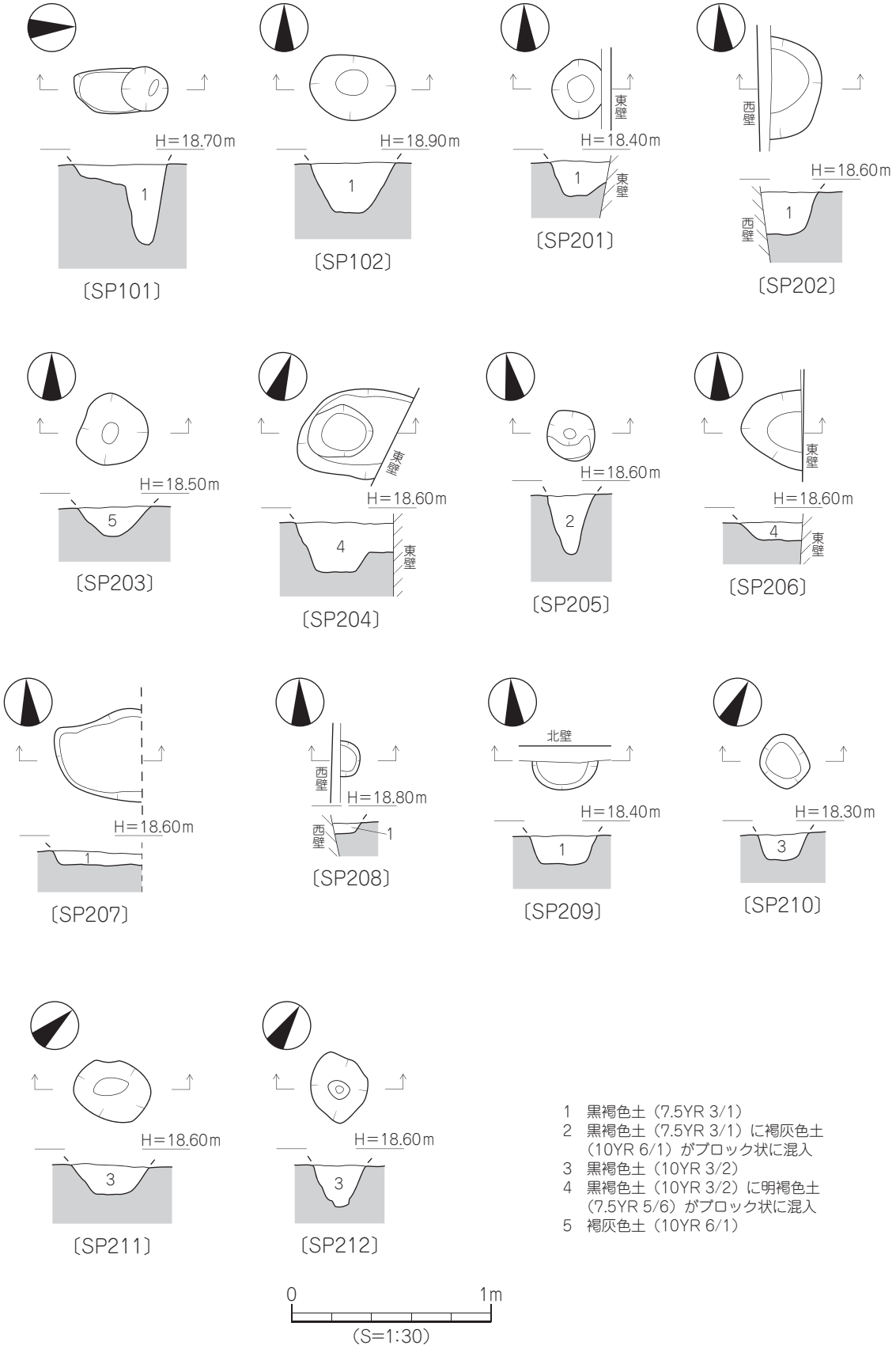
4．柱　穴

調査では、14 基の柱穴を検出した（第 34 図）。内訳は 1 区が 2 基（SP101･102）、2 区は 12 基（SP201 ～ 212）である。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の 5 種類となる。

埋土①：黒褐色土（7.5YR 3/1）･････････････････････････7 基（SP101･102･201･202･207～209）

埋土②：黒褐色土（7.5YR 3/1）に褐灰色土（10YR 6/1）
　　がブロック状に混入 ･････････････････････････1 基（SP205）

埋土③：黒褐色土（10YR 3/2）･････････････････････････3 基（SP210 ～ 212）


H=18.70m
1
〔SP101〕
H=18.90m
1
〔SP102〕
東壁
H=18.40m
1
東壁
〔SP201〕
西壁
H=18.60m
1
西壁
〔SP202〕
H=18.50m
5
〔SP203〕
東壁
H=18.60m
4
東壁
〔SP204〕
H=18.60m
2
〔SP205〕
東壁
H=18.60m
4
東壁
〔SP206〕
H=18.60m
1
〔SP207〕
西壁
H=18.80m
西壁
1
〔SP208〕
北壁
H=18.40m
1
〔SP209〕
H=18.30m
3
〔SP210〕
H=18.60m
3
〔SP211〕
H=18.60m
3
〔SP212〕
1　黒褐色土（7.5YR 3/1）
2　黒褐色土（7.5YR 3/1）に褐灰色土
（10YR 6/1）がブロック状に混入
3　黒褐色土（10YR 3/2）
4　黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土
（7.5YR 5/6）がブロック状に混入
5　褐灰色土（10YR 6/1）
0
1m
（S=1:30）

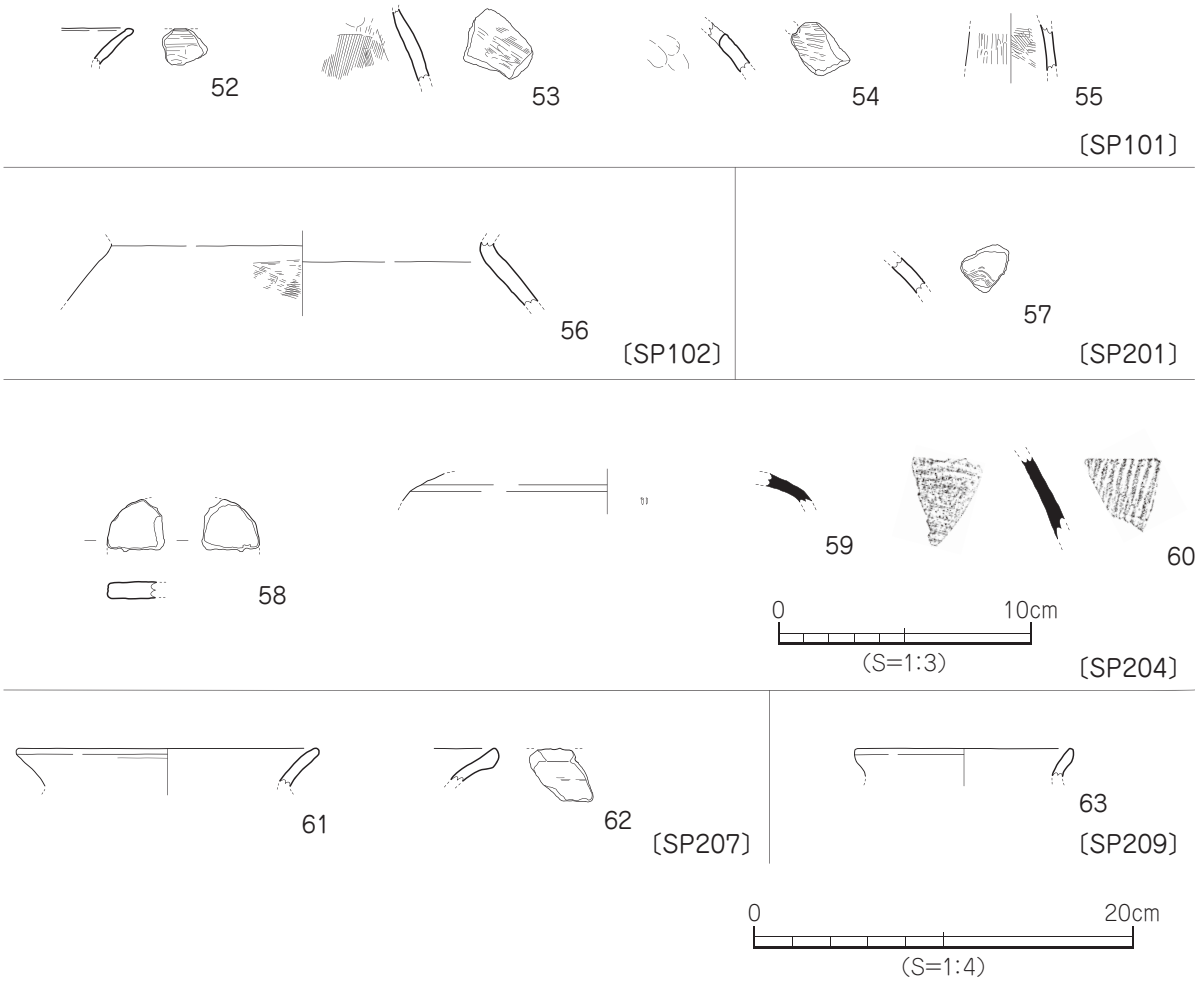
第 34 図　柱穴測量図

埋土④：黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）
　　がブロック状に混入 ……2基（SP204・206）
埋土⑤：褐灰色土（10YR 6/1）……1基（SP203）

検出した柱穴のうち、埋土④の柱穴2基は調査壁面の土層観察により、第Ⅱ層が柱穴上面を覆う。また、埋土①柱穴のうち、SP202の上面は第Ⅲ層が覆う。なお、埋土①柱穴からは弥生土器、埋土④柱穴からは土師器や須恵器の小破片が出土している。これらのことから、埋土①・②・③は弥生時代、埋土④・⑤は古墳時代以降の柱穴と考えられる。検出した柱穴のうち、以下の6基（SP101・102・201・204・207・209）から出土した遺物を掲載する。

出土遺物（第35図）

52～55はSP101出土品。52・53は甕形土器で、52の口縁部は「く」の字状をなす。54は壺形土器。無頸壺で、口縁部に径0.5cm大の円孔を看守する。55は高坏形土器の柱部片で、外面にはヘラミガキを施す。56はSP102出土品。壺形土器の頸～肩部片で、外面にはハケメ調整がみられる。57はSP201出土品。複合口縁壺の口縁部片で、クシ状工具による波状文を施す。58～60はSP204出土品。



第35図　柱穴出土遺物実測図

58 は紡錘車。甕形土器または壺形土器の胴部転用品で、厚さ 0.9㎝を測る。59 は須恵器坏蓋。小片で、天井部と口縁部の境界には凹線状の凹みが巡る。60 は須恵器甕。胴部の小片で、外面に平行叩き、内面には円弧叩きがみられる。61・62 は SP207 出土品。61 は甕形土器で、口縁部は「く」の字状をなす。62 は壺形土器。広口壺の口縁部片で、口縁端部は下方に肥厚する。63 は SP209 出土品。鉢形土器。小片で、口縁部は直立する。なお、SP101・SP102・SP201・SP207・SP209 出土品は弥生時代後期、SP204 出土品は古墳時代後期の特徴を示す。

5．包含層・地点不明遺物

発掘調査では、遺構検出時や重機掘削時に遺物が出土した。遺構検出時の遺物は「第Ⅳ層出土品」として取り扱い、重機掘削時の遺物は出土した層位や出土地点が明白でないため、「地点不明遺物」として掲載する。

（1）第Ⅳ層出土遺物（第 36 図、図版 21）

64 ～ 66 は須恵器。64・65 は坏蓋片で、64 の天井部と口縁部の境界には凹線状の凹みをもつ。65 の天井部外面には、ヘラ状工具による線刻がみられる（ヘラ記号か？：6 世紀中頃）。67 は土師器。甕形土器で口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる（6 世紀）。68 ～ 71 は弥生土器。68 は鉢形土器で、口縁部は外反する。69 は支脚形土器。脚裾部の小片で、端部は丸く仕上げる。70 は甕形土器の底部片で、平底である。71 は鉢形土器の底部で、中央部が凹む（68 ～ 71：弥生時代後期後半）。72 は浅鉢の口縁部片で、内面には貝殻条痕がみられる（縄文時代晩期後半）。73 は平基式石鏃で、刃部と基部の一部は欠損している。破損品で、材質はサヌカイトである。

（2）地点不明出土遺物（第 36 図）

74・75 は須恵器坏蓋。74 の口縁端部は、尖り気味に丸く仕上げる。76 は土師器の甕形土器。胴部上位の破片で、内外面にはハケメ調整がみられる（古墳時代後期）。

第 4 節　小　結

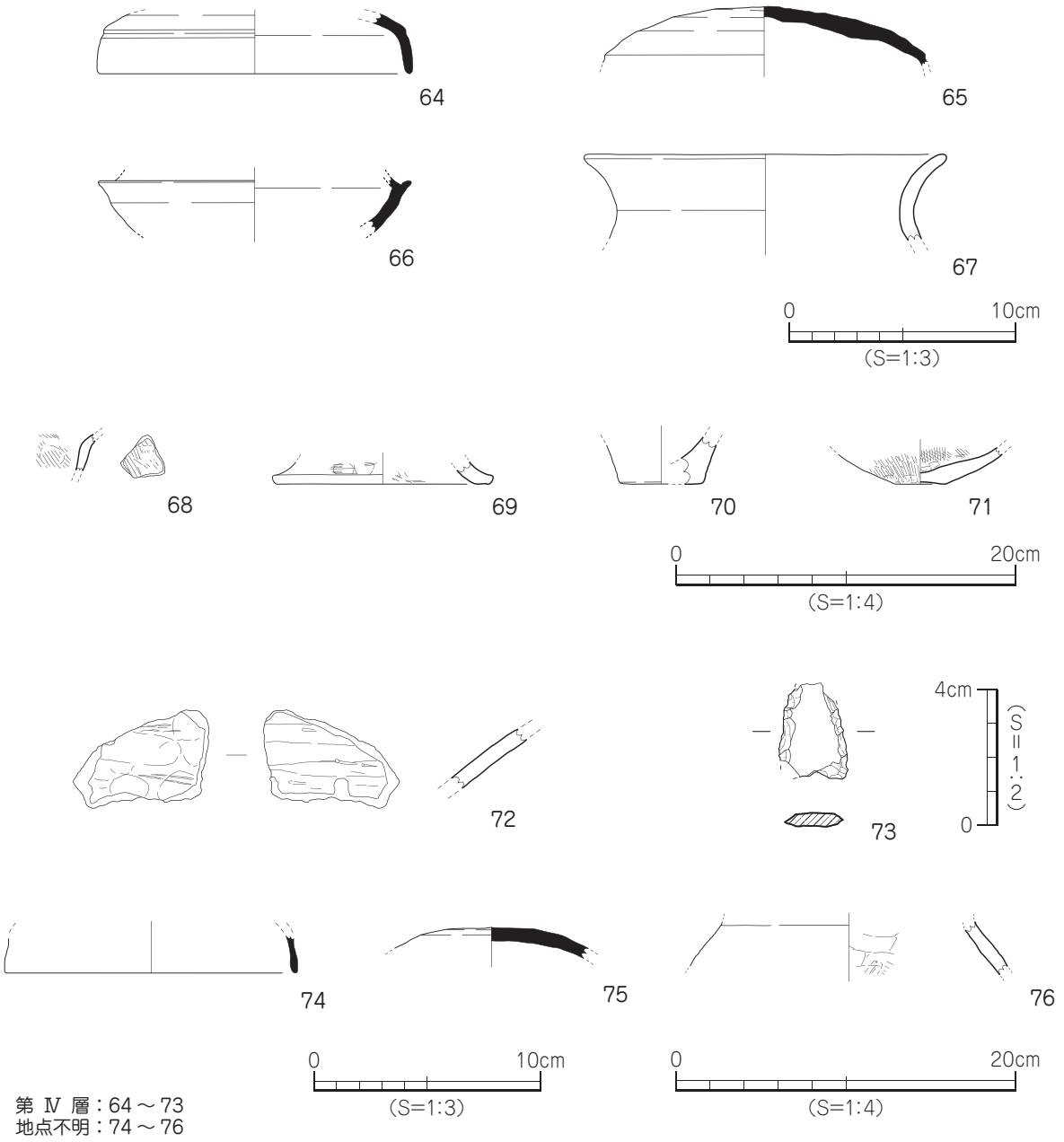
調査では、縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、まとめを行う。

1．縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、第Ⅳ層中より浅鉢片が 1 点（第 36 図 72）出土した。口縁部の小片で、内面には貝殻による条痕を確認した。遺物の特徴より、晩期後半の所産と考えられる。

2．弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴建物 1 棟と土坑 5 基を検出した。SB201 は一辺 5.7 m以上の隅丸方形状竪穴建物で、土堤を伴った炉址が付設されており、その周囲には溝が弧状に巡っている。炉址の平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.20 m、短径 0.85 m、深さ 30㎝であり、比較的大型の部類に含まれる。炉址の検出状況から、SB201 は一般的な住居ではなく工房的な性格をもつ建物と推測される。なお、



第 36 図　第Ⅳ層・地点不明出土遺物実測図

SB201 は解体後に焼却処分をした建物で、建物の廃棄時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

このほか、SB201 と同時期または SB201 構築以前と思われる土坑 5 基を検出している。出土遺物の特徴や検出層位から SK101 は弥生時代後期後半から末、他の 3 基（SK102・103・202）は弥生時代後期後半の土坑と考えられる。なお、SK203 は SB201 埋没以降の土坑であるが、ここでは弥生時代の土坑として扱っている。

発掘調査で出土した弥生土器は、大半が後期から末に時期比定されるが、SB201 や SK101 出土品には弥生時代前期後半の遺物が含まれている（第 25 図 14· 第 28 図 41）。また、SP204 からは転用品

と考えられる土製紡錘車（第35図58）が出土している。

3．古墳時代

古墳時代の遺構は、柱穴1基を検出した。SP204は直径0.46～0.58 m、深さ13cmを測る柱穴で、柱穴内からは土師器や須恵器の小片が出土している。このほか、SP204と同様の掘り方埋土をもつ柱穴（SP206）や掘り方埋土が褐灰色土の柱穴（SP203）は概ね、古墳時代以降に構築された遺構と考えられる。また、第Ⅳ層中や地点不明品の中には古墳時代後期に時期比定される遺物が数点含まれている。調査地北方に所在する久万ノ台遺跡（昭和62年度調査）からは古墳時代から古代の集落関連遺構が検出されており、本調査検出の遺構・遺物は調査地近隣地域にも古墳時代集落が存在することを示す資料といえよう。

狭小範囲の調査ではあったが、調査地を含む近隣地域における弥生後期集落の存在が明らかとなり、さらには溝を伴った炉址の検出など、数多くの貴重な資料を得ることができた。調査地が所在する衣山・久万ノ台地区は、これまでに本格的な発掘調査事例が少なく、集落様相は不明な点が多い地域であった。今回の調査結果により、同地区における集落様相や変遷の一端が解明されたことは大きな成果といえよう。

遺構一覧・遺物観察表　－ 凡例 －

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（1）遺構一覧表

地　区　欄　　グリッド名を記載。
平面形欄　　（　）推定形
規　模　欄　　（　）は現存値を示す。
埋　土　欄　　複数の土層がある場合は、以下のように記載している。
　　例）「黒褐色土　他」
出土遺物欄　　遺物名称を略記した。
　　例）弥→弥生土器、土→土師器、須→須恵器

（2）遺物観察表

法　量　欄　　（　）：復元推定値
調　整　欄　　土器の各部位名称を略記した。
　　例）㊦→天井部、㊐→口縁部、㊤→胴部
胎　土　欄　　胎土欄は混和剤を略記した。
　　例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤色土粒→赤色酸化土粒
　　（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）石・長（1～2）→「1～2㎜大の石英・長石を含む」である。
焼　成　欄　　焼成欄の略記について
　　◎→ 良好

表 10　竪穴建物一覧

竪穴（ＳＢ）	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×壁高（m）	埋　土	内部施設	出土遺物	時　期	備　考
201	2	B1 ～ C2	（隅丸方形）	5.70 × (2.80) × 0.25	黒褐色土(7.5YR 3/2)　他	炉・周壁溝・ベッド	弥・木	弥生時代後期 後半～末	

表 11　溝一覧

溝（ＳＤ）	区	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	2	C1･2	レンズ状	(1.86) × 0.96 × 0.16	灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2)	—	弥生時代後期 後半以前	SB201 床面にて検出

表 12　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	区	地　区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
101	1	A･B1	（円形）	舟底状	0.75 × (0.63) × 0.72	黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に少量混入 他	弥	弥生時代後期 後半～末	西側は調査区外に続く
102	1	A1	不整楕円形	逆台形状	(0.86) × (0.75) × 0.15	灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2)	弥	弥生時代後期 後半	西側は調査区外に続く
103	1	A1	（楕円形）	逆台形状	(0.98) × (0.54) × 0.13	黒褐色土（7.5YR 3/1）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入	弥	弥生時代後期 後半	北側と東側は調査区外に続く
201	2	A1	不整楕円形	逆台形状	0.97 × 0.60 × 0.13	灰褐色土（5YR 4/2）	—	不明	
202	2	C1	不整楕円形	逆台形状	0.76 × 0.54 × 0.20	黒褐色土（7.5YR 3/2）に灰褐色土（5YR 4/2）がブロック状に混入	弥	弥生時代後期 後半	
203	2	B･C1	不整楕円形	逆台形状	(0.66) × (0.58) × 0.26	黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に少量混入	弥	弥生時代末	西側は調査区外に続く

表 13　柱穴一覧　（1）

柱穴（ＳＰ）	区	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
101	1	A1	楕円形	0.48 × 0.22 × 0.40	黒褐色土（7.5YR 3/1）	弥	
102	1	B1	楕円形	0.43 × 0.33 × 0.25	黒褐色土（7.5YR 3/1）	弥	
201	2	A2	円形	0.30 × (0.25) × 0.18	黒褐色土（7.5YR 3/1）	弥	
202	2	B1	（円形）	0.52 × (0.25) × 0.21	黒褐色土（7.5YR 3/1）		
203	2	B1･2	円形	0.35 × 0.35 × 0.14	褐灰色土（10YR 6/1）		
204	2	C1･2	（楕円形）	(0.48) × 0.46 × 0.24	黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入	土・須・紡錘車	
205	2	C1	円形	0.23 × 0.23 × 0.29	黒褐色土（7.5YR 3/1）に褐灰色土（10YR 6/1）がブロック状に混入		
206	2	B1 ～ C2	（楕円形）	(0.30) × 0.40 × 0.08	黒褐色土（10YR 3/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入		
207	2	C1･2	（不整楕円形）	0.47 × (0.44) × 0.06	黒褐色土（7.5YR 3/1）	弥	

柱穴一覧 （2）

柱穴（SP）	区	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
208	2	C1	（円形）	0.18 × (0.10) × 0.05	黒褐色土（7.5YR 3/1）		
209	2	A1･2	（楕円形）	0.34 × (0.13) × 0.14	黒褐色土（7.5YR 3/1）		
210	2	C1	不整円形	0.28 × 0.25 × 0.13	黒褐色土（10YR 3/2）		
211	2	C1	楕円形	0.40 × 0.30 × 0.14	黒褐色土（10YR 3/2）		
212	2	C2	不整楕円形	0.36 × 0.28 × 0.20	黒褐色土（10YR 3/2）		

表 14　SB201 出土遺物観察表　（土製品） （1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (20.0) 残高 4.1	「く」の字状口縁。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ハケ(10 本 /cm)	㊀マメツ ㊁ナデ	橙色 橙色	石･長（1 ～ 4） ◎		
2	甕	口径 (19.1) 残高 2.1	口縁部小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ハケ（8 本 /cm）	ハケ(12 本 /cm)	褐色 にぶい橙色	石・長（1） ◎	黒斑	
3	甕	口径 (14.7) 残高 2.4	口縁部小片。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	ハケ→ヨコナデ	ハケ (9 ～ 10 本 /cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1） ◎		
4	甕	口径 (16.8) 残高 2.9	口縁部小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 2） ◎		
5	甕	口径 (16.3) 残高 1.8	口縁部小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	明褐灰色 明褐灰色	石･長（1 ～ 2） ◎		
6	甕	口径 (24.4) 残高 2.9	口縁部小片。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	ハケ→ナデ	ハケ (8 ～ 9 本 /cm) →ヘラミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石･長（1 ～ 2） ◎		
7	甕	口径 (24.0) 残高 2.6	口縁部小片。口縁端部は「コ」字状で、口縁端面はナデ凹む。	ナデ	ハケ→ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石･長（1 ～ 2） ◎	黒斑	
8	甕	残高 3.7	口縁～胴部小片。	マメツ	ハケ→ナデ	橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 2） ◎		
9	甕	残高 1.8	口縁～胴部小片。器壁は厚い。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 黒色	石･長（1 ～ 2） ◎	黒斑	
10	甕	残高 2.6	胴部小片。	ハケ→タタキ	ハケ（5 本 /cm） 指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 3） ◎		
11	甕	残高 2.9	胴部小片。	ハケ（8 本 /cm） →ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 2） ◎		
12	甕	残高 2.0	口縁～胴部小片。	ハケ→ナデ	ハケ(10 本 /cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 3） 赤色土粒 ◎		
13	甕	残高 4.8	胴部片。	タタキ	ハケ（8 本 /cm）	にぶい褐色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 3） 赤色土粒 ◎		20
14	甕	残高 4.9	胴部片。ヘラ描き沈線文 2 条以上あり。	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石･長（1 ～ 2） ◎		20
15	甕	底径 (7.1) 残高 3.2	平底。1/5 の残存。	ナデ	ハケ→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石（1） 赤色土粒 ◎		
16	甕	底径 (2.4) 残高 3.4	小さな平底。1/5 の残存。	マメツ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石･長（1 ～ 3） ◎		

SB201 出土遺物観察表　（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
17	壺	口径 (19.2) 残高 1.0	広口壺。口縁端部に沈線文3条あり。小片。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
18	壺	口径 (25.0) 残高 1.4	広口壺。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/6の残存。	マメツ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） ◎		
19	壺	口径 (24.2) 残高 1.0	広口壺。口縁端部に波状文あり。小片。	マメツ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
20	壺	口径 (30.0) 残高 2.9	複合口縁壺。口縁端部は内傾し、クシ描き波状文（4条－4条－3条）あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） 赤色土粒 ◎		20
21	壺	残高 1.0	複合口縁壺。外面に波状文あり。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ◎		
22	壺	残高 1.7	頸部小片。	ハケ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		
23	壺	残高 2.9	肩部片。器壁は厚い。小片。	ハケ（10本/cm） →ナデ	ハケ（6本/cm） →ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長（1～3） ◎		
24	壺	残高 3.1	頸～肩部片。断面方形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文あり。小片。	マメツ	ハケ（8本/cm） →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		20
25	壺	底径 (1.8) 残高 1.9	底部1/4の残存。小さな平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） ◎		
26	鉢	口径 (21.9) 残高 1.7	直口口縁。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎		
27	鉢	口径 (18.7) 残高 2.2	直口口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長（1～6） ◎		
28	鉢	口径 (41.2) 残高 7.8	大型品。口縁部は外反し、口縁端部はナデ凹む。1/6の残存。	ハケ （5～6本/cm） →ナデ	ハケ →ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎		20
29	鉢	残高 2.6	胴部片。	ハケ（10本/cm）	ハケ（10本/cm） →ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） 赤色土粒 ◎		
30	鉢	残高 1.6	胴下部小片。	ハケ（10本/cm）	ナデ 指頭痕	にぶい褐色 灰褐色	石・長（1～2） ◎		
31	鉢	底径 2.2 残高 2.0	突出する小さな平底。	ナデ	ハケ （7～8本/cm）	橙色 橙色	石・長（1～2） 赤色土粒 ◎		20
32	高坏	口径 (24.2) 残高 2.5	坏部小片。口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
33	高坏	残高 2.8	坏部小片。坏下部に稜を持ち、口縁部は外反する。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
34	高坏	残高 1.9	柱部小片。	ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		
35	器台	口径 (39.8) 残高 1.4	口縁端面に刻目あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		20
36	高坏	残高 2.1	坏部片。坏下部に稜あり。	ヘラミガキ	ヨコナデ	にぶい灰黄色 にぶい灰黄色	石・長（1） ◎	炉址	
37	甕	底径 4.3 残高 5.9	底部片。外面中央部が凹む。	タタキ	ナデ	褐色 黒色	石・長（1～2） ◎	炉址	20

表 15　SK101 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
38	甕	口径 （16.9） 残高 1.6	「く」の字状口縁。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	タタキ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） 赤色土粒 ◎		
39	甕	残高 3.7	口縁～胴部片。	ハケ（8 本 /cm）	ヘラミガキ →ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長（1） ◎		
40	甕	残高 3.1	胴部小片。	タタキ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） 赤色土粒 ◎		
41	甕	残高 3.0	クシ描き沈線文５条と、沈線文の上下に２ケ１組の竹管文あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		21
42	鉢	底径 1.0 残高 4.2	突出する小さな平底。	ハケ（6 本 /cm）	ナデ	にぶい黄橙色 赤褐色	石･長（1 ～ 2） ◎	黒斑	21

表 16　SK102 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
43	壺	残高 1.6	複合口縁壺。沈線文２条あり。小片。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石･長（1 ～ 2） ◎		

表 17　SK103 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	残高 3.6	胴部小片。	ハケ（7 本 /cm）	ハケ（8 本 /cm） →ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石･長（1 ～ 2） ◎	煤付着	

表 18　SK202 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
45	甕	残高 2.3	「く」の字状口縁。小片。	ハケ（7 本 /cm） →ナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石･長（1 ～ 5） ◎		
46	鉢	口径 （21.1） 残高 3.0	外反口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ヘラミガキ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石･長（1 ～ 3） ◎		
47	壺	底径 （6.0） 残高 4.8	平底。器壁は厚い。1/3 の残存。	ハケ（9 本 /cm）	ハケ（8 本 /cm） →ナデ	灰褐色 黒色	石･長（1 ～ 3） ◎	黒斑	21

表 19　SK203 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
48	甕	残高 1.1	口縁部小片。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	ヨコナデ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石･長（1 ～ 4） ◎		
49	壺	口径 （14.0） 残高 2.5	太頸壺。口縁部は短く外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石･長（1 ～ 2） 赤色土粒 ◎		
50	壺	口径 （7.6） 残高 2.8	細長頸壺。口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味。クシ描き沈線文 20 条あり。小片。	ヘラミガキ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		21
51	高坏	残高 1.6	坏部小片。坏下部に稜あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		

表 20　柱穴出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
52	甕	残高　1.9	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。小片。	ハケ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎	SP101	
53	甕	残高　3.8	胴部小片。	ヘラミガキ →ナデ	ハケ（7 本 /cm）	赤褐色 赤褐色	石・長（1 ～ 2） ◎	SP101	
54	壺	残高　2.7	無頸壺。径 0.5cm 大の円孔あり。小片。	タタキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1 ～ 2） ◎	SP101	
55	高坏	残高　2.5	柱部小片。中空。	ヘラミガキ	ハケ（6 本 /cm）	赤褐色 赤褐色	石（1） ◎	SP101	
56	壺	残高　3.3	頸～肩部片。	ハケ （8 ～ 9 本 /cm）	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1 ～ 2） ◎	SP102	
57	壺	残高　1.9	複合口縁壺。クシ描き波状文あり。小片。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石（1） ◎	SP201	
58	紡錘車	長さ　2.6 幅　3.0 厚さ　0.9	転用品。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長（1 ～ 3） ◎	SP204	
59	坏蓋	残高　1.1	天井～口縁部片。天井部と口縁部との境界に凹線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP204	
60	甕	残高　3.2	胴部小片。	平行叩き	円弧叩き	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP204	
61	甕	口径（15.8） 残高　2.0	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。小片。	ハケ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1 ～ 3） ◎	SP207	
62	壺	残高　1.7	広口壺。口縁端部は肥厚する。小片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1 ～ 2） ◎	SP207	
63	鉢	口径（11.1） 残高　1.5	直口口縁。口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長（1 ～ 2） ◎	SP209	

表 21　第Ⅳ層出土遺物観察表　（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
64	坏蓋	口径（13.7） 残高　2.7	天井部と口縁部の境界に凹線状の凹みあり。口縁端部は尖り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
65	坏蓋	残高　2.6	天井部と口縁部の境界に稜を持つ。天井部外面に線刻あり。1/6 の残存。	㊦回転ヘラケズリ （1/2） ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
66	坏身	残高　2.5	たちあがりは欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
67	甕	口径（15.7） 残高　3.8	外反口縁。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	㊤ヨコナデ ㊥ナデ	橙色 橙色	石・長（1 ～ 2） ◎		
68	鉢	残高　2.1	外反口縁。小片。	ハケ（5 本 /cm）	ハケ（5 本 /cm）	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1 ～ 2） 赤色土粒 ◎		
69	支脚	底径（12.4） 残高　1.3	脚裾部小片。脚端部は丸く仕上げる。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1 ～ 2） ◎		
70	甕	底径（4.8） 残高　2.7	平底。1/4 の残存。	マメツ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1） ◎		
71	鉢	底径（3.0） 残高　2.1	やや上げ底。1/3 の残存。	ヘラミガキ	ハケ（5 本 /cm）	黒色 黒色	石・長（1 ～ 2） ◎	黒斑	21

第Ⅳ層出土遺物観察表　（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
72	浅鉢	残高　2.6	口縁部片。	ナデ	条痕	にぶい褐色 褐色	石・長（1～4） 金 ◎		21

表 22　第Ⅳ層出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
73	石鏃	一部欠損	サヌカイト	(2.80)	2.10	0.40	2.52	破損品	21

表 23　地点不明出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
74	坏蓋	口径（12.8） 残高　1.6	口縁部片。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
75	坏蓋	残高　1.4	天井部片。1/4 の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
76	甕	残高　3.1	胴部小片。	ハケ	ハケ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） 赤色土粒 ◎	黒斑	

第５章　調査の成果と課題

本書掲載の２遺跡は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、松山市教育委員会事務局文化財課の指導のもと、国からの国庫補助を受けて実施した埋蔵文化財の発掘調査である。両遺跡は松山平野西部、衣山・久万ノ台地区に所在している。

衣山東組遺跡が所在する衣山地区では近年、発掘調査事例が増加し、衣山北組遺跡をはじめ、衣山大塚北遺跡、衣山内宮田遺跡、衣山西ノ岡古墳など数多くの調査成果が得られている。一方、久万山本遺跡が所在する久万ノ台地区では、本格的な発掘調査は数例しか実施されていない。ここでは、各調査の成果をまとめる。

１．衣山東組遺跡

衣山東組遺跡は、衣山地区の西に広がる低位丘陵上に位置している。調査では、古代末から近世までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は掘立柱建物址１棟、溝１条である。

掘立１は建物全体ではなく、柱列の一部を検出した。東西方向の建物址で、柱穴の検出状況より建て替えが施された建物址である。建物を構成する柱穴からは弥生土器や土師器、須恵器の小破片のほかに、詰石または根詰石に転用されたと思われる瓦片が出土している。出土した軒平瓦の瓦当文様は、外区外縁に珠文が付く重郭文や三重弧文であり、凹面には布目痕が残る。施文や成形、調整方法などから、制作年代は白鳳期と推測される。このことから掘立１は概ね古代末から中世初頭頃の建物址と考えられる。次に、検出幅 1.20 m、深さ 10㎝程度の溝 SD1 からは土師器皿と土瓶が出土した。出土した皿は口径 7.0 ～ 11.6㎝、器高 1.1 ～ 1.6㎝で、底部外面には回転糸切り痕が残る。出土品には多少の時期差が認められ、概ね中世末から近世の遺構と考えられる。なお、現代の地割と溝の方位が等しいことから、地鎮に関連する溝と推測される。このほか、撹乱土内からは石製の硯や銭貨が出土している。このうち、銭貨は銅製の寛永通宝であり、いわゆる新寛永銭である。

本調査では、白色微粘性土を確認した。調査地近隣にある衣山窯跡周辺からは良質の瓦粘土が採掘されるとの記述が愛媛県史などに残されており、本層がそれに該当するものと考えられる。

２．久万山本遺跡

久万山本遺跡は、衣山地区北側に広がる丘陵低位部に位置している。調査面積は約 24㎡であり、狭小範囲の調査ではあったが、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物を確認した。

検出した遺構は竪穴建物１棟、溝１条、土坑６基、柱穴 14 基である。このうち、SB201 は一辺 5.7 m以上を測る隅丸方形状建物と思われ、建物内には比較的大型の炉址が付設されている。炉址は長径 1.20 m、短径 0.85 m、深さ 30㎝を測る楕円形状の掘り込みをもち、炉堤と考えられる高まり部分を検出した。掘り込み内からは、中位付近に厚さ 10㎝程度の焼土を含む炭化物層が堆積している。また、掘り込みを取り囲むように幅８～ 20㎝、深さ６～ 14㎝の溝が巡り、溝内には灰が少量検出された。建物規模から判断すると炉址の範囲が広く、居住空間ではなく工房的な性格をもつ建物と考えられる。但し、建物内からは生産に伴う遺物は検出されていない。また、建物からは炭化物や炭化材、焼土が散在して検出されたが、焼土はいずれも炭化材の上面にあり、さらに炭化材や炭化物には規則性が認

められないことから、火災を被った建物ではなく、建物廃絶時に屋根材や柱材を除去した後、焼却処分をしたものと推測される。出土遺物の特徴より、SB201 の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

このほか、検出した土坑のうち、5 基の土坑（SK101 ～ 103・202・203）は SB201 と同時期と考えられる。また、柱穴内から弥生土器のほかに古墳時代後期の土師器や須恵器が出土している。これらの資料は弥生時代後期だけではなく、古墳時代以降にも調査地や近隣地域に該期の集落が存在することを示唆しているものと思われる

出土品をみると、遺構や包含層中からは弥生時代後期の土器が数多く出土しているが、SB201 や SK101 出土品には弥生時代前期後半の遺物が含まれており、さらには包含層資料ではあるが縄文時代晩期の浅鉢片 1 点が出土している。これらの資料から、調査地近隣地域には該期の遺跡が存在する可能性がある。

以上、2 遺跡についてのまとめを行った。衣山地区では近年の調査により、弥生時代の遺跡が数多く発見されている。衣山大塚遺跡や衣山西ノ岡遺跡 2 次調査では弥生時代後期後半の竪穴建物が検出され、さらに衣山内宮田遺跡からは弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴建物が検出されている。また、衣山北組遺跡からは掘立柱建物や土坑が検出されるなど、同地区内における弥生後期集落の存在が明らかになっている。しかしながら、古墳時代以降については、永塚古墳や衣山西ノ岡古墳など、地区内における古墳の存在は知られているが、一般的な集落の様相は不明な点が多い。平成 23 年度に実施した衣山大塚北遺跡からは、古墳時代終末期の竪穴建物が報告されているが、明確な遺構の検出事例は少ない。なお、衣山西ノ岡古墳や衣山内宮田遺跡からは包含層中より古代、奈良時代や平安時代の遺物が検出されている。これらのことをふまえ、衣山東組遺跡で検出した掘立柱建物の存在は、古代末から中世初頭における集落が同地区内に存在していることを示す貴重な資料といえよう。なお、建物内から出土した白鳳期と思われる瓦と、近隣に存在した衣山窯跡との関係性については、窯跡の操業時期も含めて今後の課題である。このほか、地区内では衣山西ノ岡古墳の調査において江戸時代後期の土坑が複数検出されており、衣山東組遺跡出土の銭貨（新寛永通宝）や石硯は、近隣に存在する近世集落に関連する資料といえる。

一方、久万ノ台地区では発掘調査事例が極めて少なく、集落様相の解明には至っていない。平成 3 年度に実施した野津子山遺跡からは、包含層資料ではあるが弥生時代後期後半に時期比定される土器片が出土し、同地区内における弥生集落の存在が示唆されていたが、今回実施した久万山本遺跡より同時期の竪穴建物が検出され、久万ノ台地区にも該期における集落の存在が確実視されることになった。なお、検出した竪穴建物は工房的な性格をもつ可能性があり、生産性のある集落が営まれたことも集落様相解明において考慮する必要がある。さらに、久万山本遺跡からは弥生時代の竪穴建物以外に古墳時代の柱穴や包含層中より該期の遺物が出土したことから、地区内における古墳時代集落の存在も明らかとなってきている。

今後の資料増加により、衣山・久万ノ台地区において、更なる集落様相や変遷及び構造解明が期待される。

写真図版

写真図版 1 ～ 9：衣山東組遺跡
写真図版 10 ～ 21：久万山本遺跡

図版1

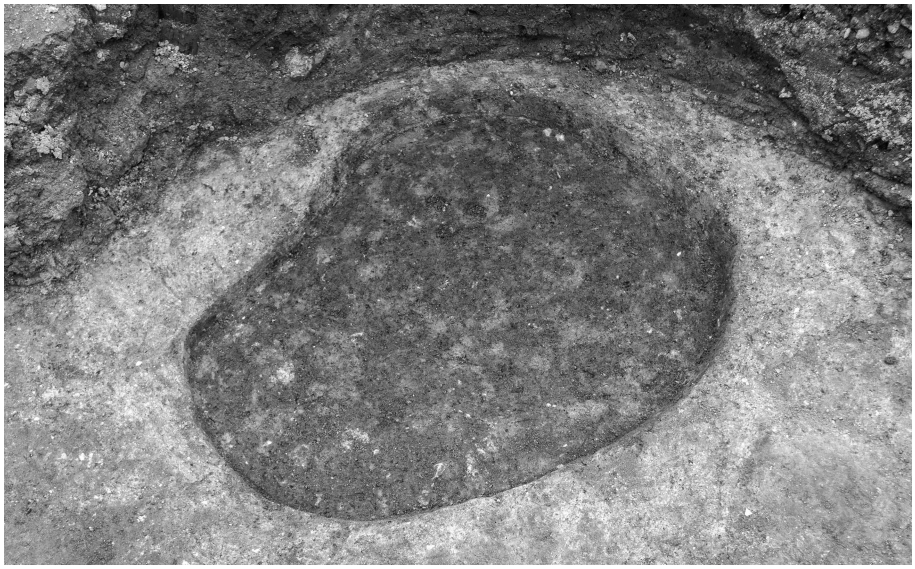
1．遺構検出状況
（北西より）

2．西壁土層（東より）

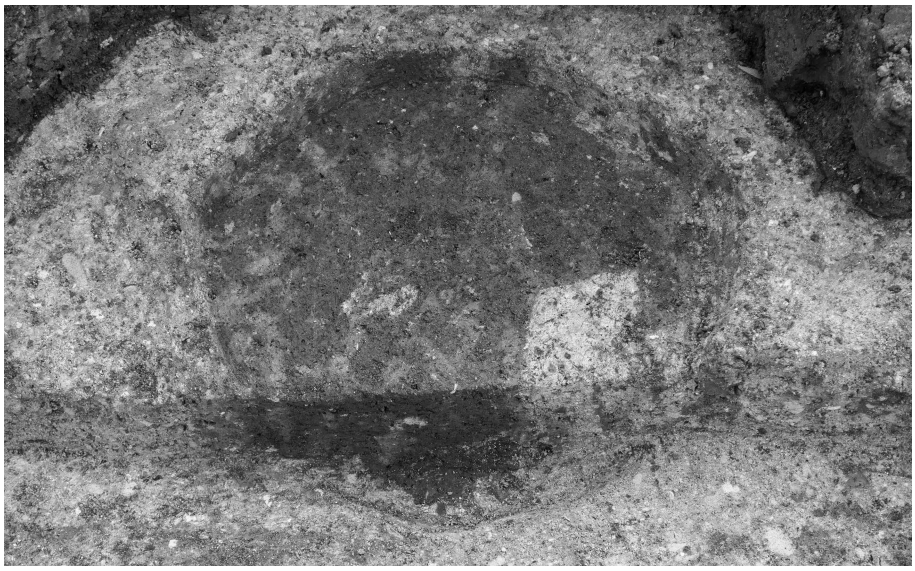
3．掘立１検出状況
（北より）

図版2

1. SP1・SP4 検出状況
（北より）



2. SP2・SP5 検出状況
（北より）



3. SP3 検出状況
（北より）

1. SP1・SP4 土層
（東より）

2. SP1 遺物出土状況
（東より）

3. SP1・SP4 完掘状況
（東より）

図版4

1. SP2・SP5 土層
（北西より）

2. SP2 遺物出土状況
（北より）

3. SP5 完掘状況
（北より）

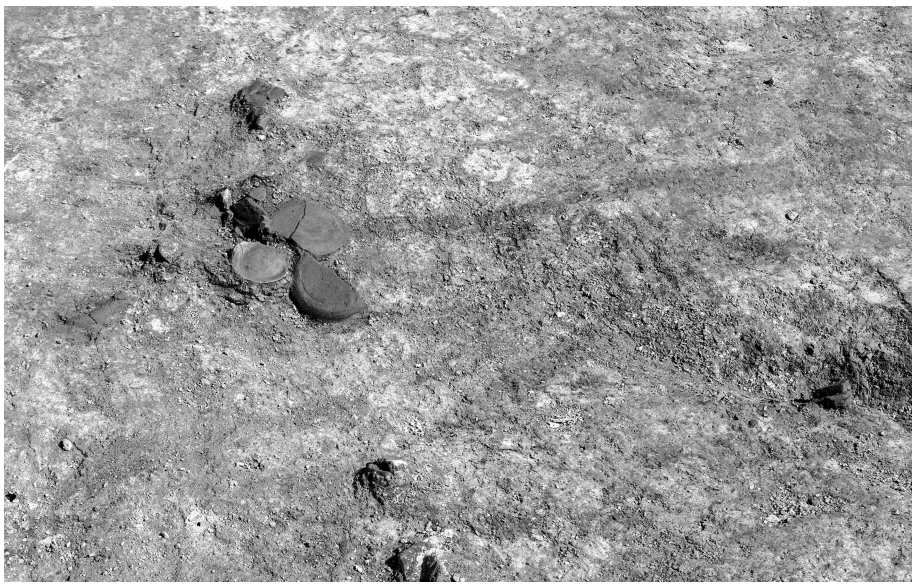
1. SP3 土層（東より）

2. SP3 遺物出土状況
（北より）

3. SP3 完掘状況
（北より）

図版6

1. SD1 遺物出土状況
（東より）



2. SD1 遺物出土状況
（西より）

1．出土遺物①（掘立１：１・２）

図版8

1．出土遺物②（掘立１：３～６）

1．出土遺物③（SD1：7・9・11・14・16、撹乱：17・18）

図版10

1．調査地より松山城を望む（北西より）

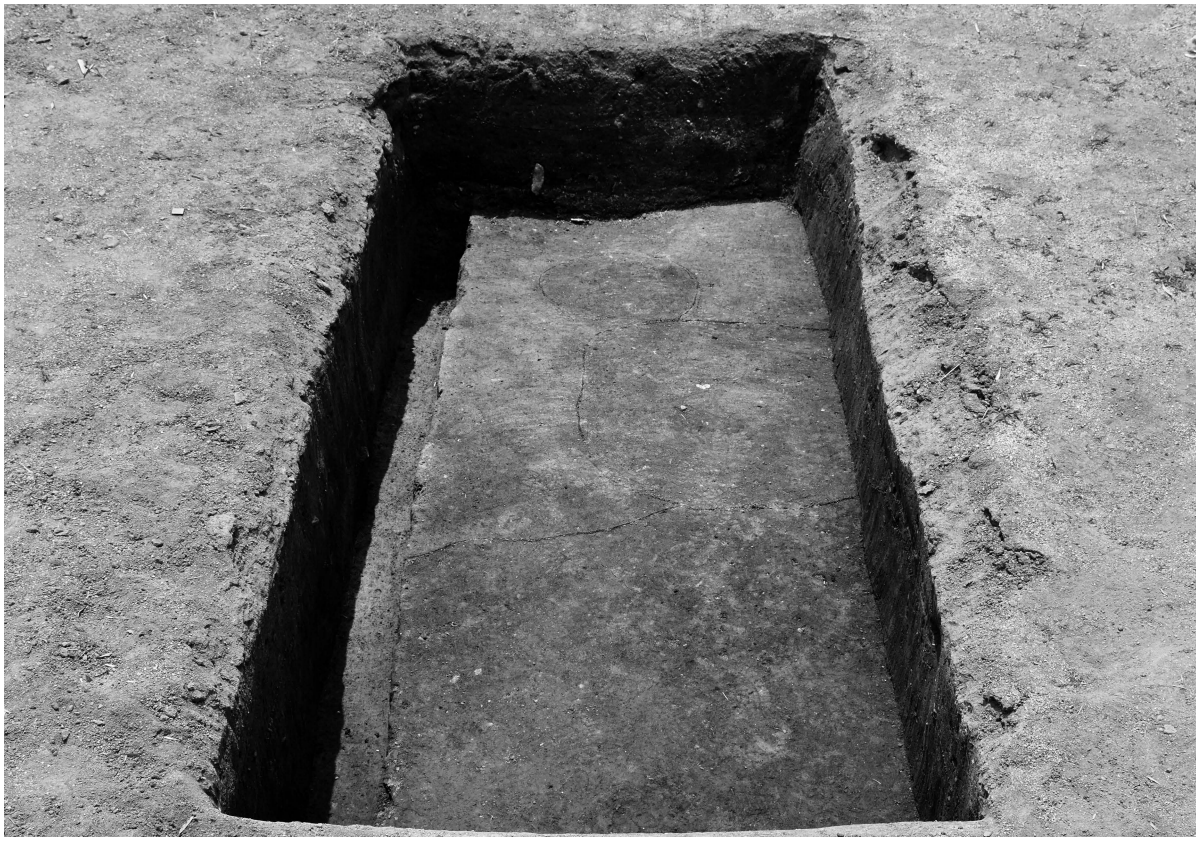
2．調査前全景（北西より）

図版11

1．調査地全景（北より）

2．基本土層（東より）

図版12



１．１区遺構検出状況（北より）

２．２区遺構検出状況（南より）

１．１区遺構完掘状況（南東より）

２．２区遺構完掘状況（南より）

図版14

1．SB201・SD201 検出状況（南より）

2．SB201 炭化物検出状況（南より）

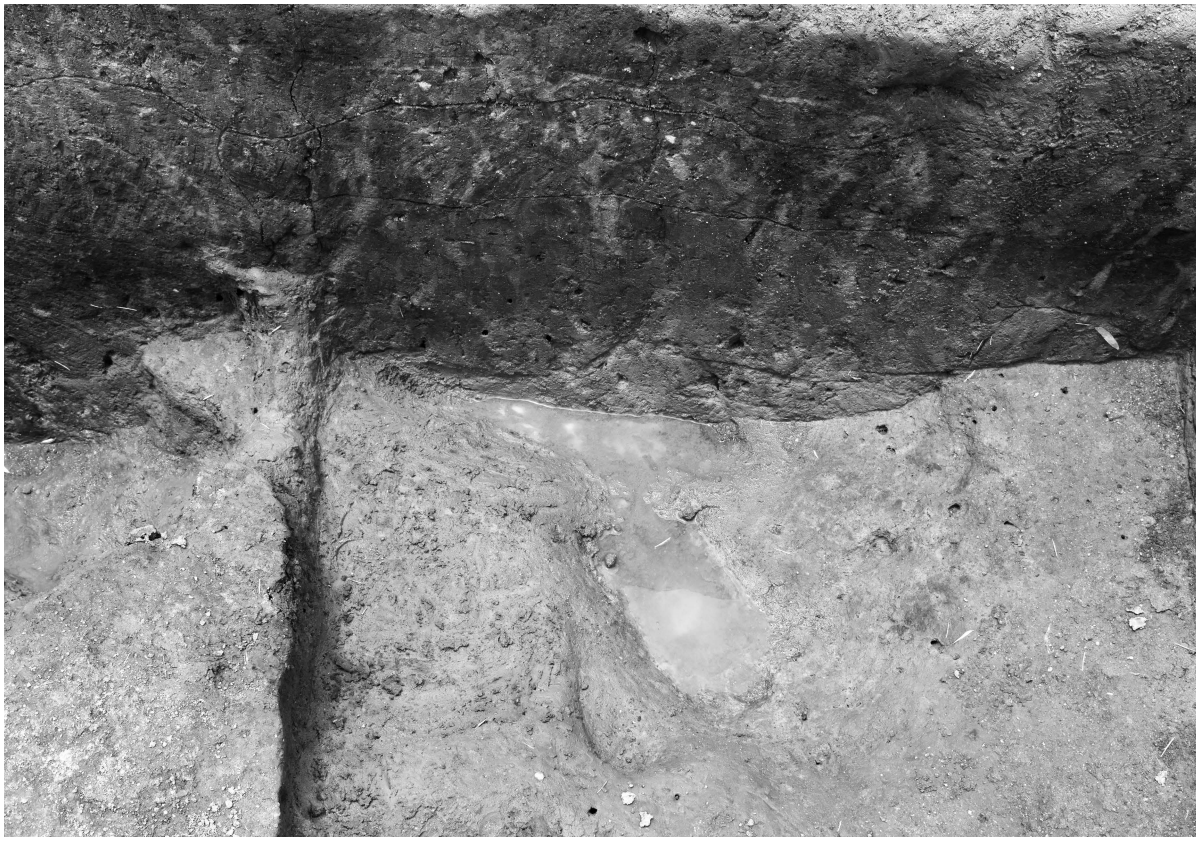
1．SB201 炉址検出状況①（東より）

2．SB201 炉址検出状況②（南より）

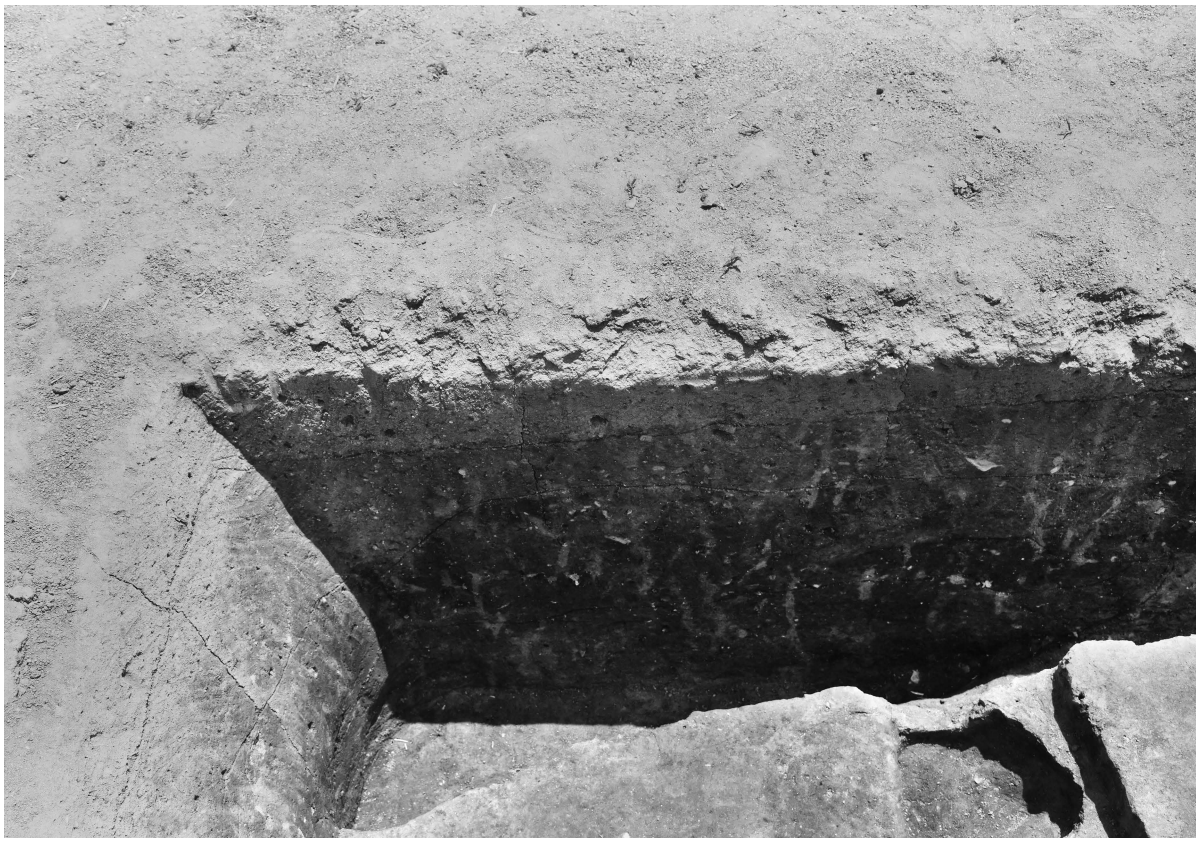
図版16

1．SB201 炉址検出状況③（北西より）

2．SK101 検出状況（東より）



1．SK102 検出状況（東より）



2．SK103 検出状況（西より）

図版18

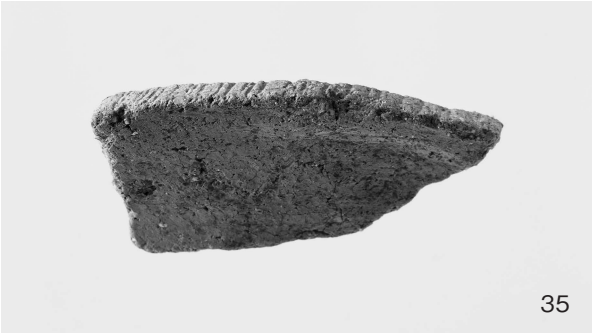
1．SK201 半截状況（南より）

2．SK202 半截状況（南東より）

1．SK203 検出状況（東より）

2．作業風景（南西より）

図版20



1．SB201 出土遺物

1．出土遺物（SK101：41・42、SK202：47、SK203：50、第Ⅳ層：64・65・71 ～ 73）

報　告　書　抄　録

ふりがな	きぬやまひがしぐみいせき・くまやまもといせき
書名	衣山東組遺跡・久万山本遺跡
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第209集
編著者名	山本 健一・水本 完児・大西 朋子
編集機関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2023（令和5）年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
衣山東組遺跡（きぬやまひがしぐみいせき）	松山市衣山二丁目326番4の一部（まつやましきぬやま）	38201		33°51′9″	132°44′31″	20160222 ～ 20160318	約75.47	個人住宅建設
久万山本遺跡（くまやまもといせき）	松山市久万ノ台1035番の一部（まつやましくまのだい）	38201		33°51′28″	132°44′36″	20170526 ～ 20170609	約24.00	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
衣山東組遺跡	集落	古代・中世 近世	掘立 溝	弥生・土師・須恵・瓦 土師	古代末から中世初頭の建物址を検出
久万山本遺跡	集落	縄文 弥生 古墳	― 竪穴・溝・土坑 柱穴	縄文 弥生・木 土師・須恵	弥生後期の竪穴建物（焼失）を検出

要　約

衣山東組遺跡からは、古代末から近世までの遺構・遺物を確認した。検出した遺構は、掘立柱建物址1棟と溝1条である。建物を構成する柱穴からは詰石の転用と思われる瓦が出土しており、瓦当部分には珠文が付く重郭文や三重弧文が施されている。形態や製作技法より、これらの瓦は白鳳期の特徴を示しており、建物の時期は古代末から中世初頭と考えられる。また、溝からは中世末から近世に時期比定される土師器の皿や土瓶が出土し、溝の方位が現在の地割の軸線と類似していることから、地鎮に関連する遺構と推測される。

久万山本遺跡からは、縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物を確認した。縄文時代の遺構は未検出であるが、包含層中より晩期後半の土器片が出土している。弥生時代では竪穴建物1棟と土坑5基を検出し、遺物は後期から終末期の土器や石器が出土した。竪穴建物からは焼土や炭化物が大量に検出され、その状況から廃絶時に焼却処分されたものと判断される。なお、建物内には長径1.20 m、短径0.85 m、深さ30cmを測る楕円形状の掘り込みと、それを取り囲む円形に巡る溝が検出された。なお、掘り込みと溝は連結しており、一連の遺構（炉址）と考えられる。このような炉址は一般的な住居にはみられないことから、工房的な性格をもつ建物と考えられる。このほか、検出した14基の柱穴内からは、弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が出土している。

両遺跡が所在する衣山・久万ノ台地区では数基の古墳は確認されているが、一般集落の様相解明には至っていない。今回実施した久万山本遺跡の調査成果により、同地区における弥生時代後期集落の存在が明らかとなり、集落様相を解明するうえで重要な手がかりを得ることができた。

松山市文化財調査報告書　第209集

衣山東組遺跡
久万山本遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

令和5年3月15日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

発　行　松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948－6605

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790－0012　松山市湊町7丁目1－8
TEL（089）941－9111